

幼児の教育

第五十卷

第六號

日本幼稚園協會



フレイベル百年祭記念特集號

6

kazuo

フレーベル研究のために

倉橋惣三著

フレーベル

B6判一五二頁
予価一〇〇〇円

本書はフレーベルを、その教育精神とその教育的直覚において捉え、その教育的天才の真に尊重すべき所以を強調されている。著者は児童教育の権威。

長田新譯(岩波文庫)

フレーベル自傳

定価六〇円

フレーベルが自ら自分の幼児からの生涯と思想の發展を語る書、その教育精神を理論するに欠くことのできない内面的資料である。しかも容易に入手し、心に原資料を基き教育の權威たる訳者が特に心をこめて全訳せるもの。

長田新著

フレーベルに還れ

B6判三九頁
定価二〇〇円

凡そ幼稚園教育の真精神は、基督教の真精神がキリストのといた教に、そして佛教の真精神が釈迦のといた教にかえるように、フレーベルの人のといた教にかえるのでなく、ては決して把握出来るものでない。この信念が奔出してこの書をなすに至つた。(著者序文より)

莊司雅子著

フレーベルの教育學

A5判上製四五〇頁 定価四〇〇円 三三五円
人類教育の全史中最も深遠難解であると言れるフレーベルの教育思想を最も端的に解明せるもの。

東京都千代田区神田神保町2-4

株式会社フレーベル館

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

岩波書店

好評新刊

副島ハマ著

折り紙教本

B6二一四頁 圖版六五〇箇入
定価二〇〇圓 送料 一二圓

製作の権威副島先生が我國独特の芸術味ゆたかな、楽しい折り紙遊びを何時までも残したい気持ちから、幼稚園、保育所の子供達の毎日の保育のために、親が側におない赤坊のための眺め玩具をつくるために、養護施設の子供の雨ふりのつれづれを慰めるよすがとして、又、小さい身体にそれ／＼に負い切れない負担を背負つてゐる精神薄弱児施設、療育施設、教護院の子供達の日日を明るくしてやるために、同種の本の絶無である斯界に送られた新著――

「私が夜更けに説明図を書き乍ら御多幸を祈つた先生方――講習会でお眼にかつた先生方――保母養成所の生徒さん方――施設の子供たち――の中の誰かに、この紙一枚から施される美しい芸術と折り紙遊びの楽しさを学びとつて頂けば、……私はこの願いをこめてこの書を皆様の御手許にお贈りいたします。」(著者序文より)

東京都千代田区神田神保町二ノ四

株式会社 フレーベル館

幼 児 の 教 育

第五十卷・第六号

フ レーベル 百 年 記 念 特 集

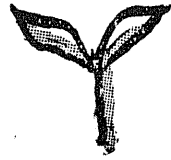
— 目 次 —

フレイベル年譜……………	脇田 和	(2)
フレイベル百年記念特集号に序して 日本に於けるフレイベル研究を顧る……………	倉橋 惣三	(3)
フレイベル教育学の根本問題……………	長田 新	(8)
フレイベルの幼児教育論……………	荘 司 雅 子	(20)
アメリカに於けるフレイベル運動……………	水野 浩 志	(30)
フレイベルの生涯……………	津 守 真	(49)
フレイベル百年記念講演会豫告……………		(67)
記 録 ……………		(68)
単位修得のお知らせ……………	日本幼稚園協会	(70)
会 か ら……………		(72)

(表紙……………脇田 和)

フレールベル年譜

- 一七八二 生誕（四月二十一日）
 一七九七 林業見習生としてノイハウスに赴く
 一七九九—一八〇一 イエナに学ぶ
 一八〇二—一八〇三 林業に従事
 一八〇五 フランクフルト・オン・マインに赴く。グルーナ
 模範学校の教師となる。イベルダンのベスタロッツ
 学園を訪う
 一八〇七 フランクフルトに近いホルツハウゼン家の子らの家
 庭教師となる
 一八〇八—一八一〇 生徒と共にイベルダンのベスタロッツ学園に赴く
 一八一〇 フランクフルトに帰る
 一八一一—一八一二 ケツチンゲン及びベルリン大学に学ぶ
 一八一三—一八一四 普佛戦争に従軍
-
- 一八一四—一八一六 ベルリン 鉱物博物館助手
 一八一六 グリースハイムに全独教育所を開く
 一八一七 カイルハウに移る
 一八一八 ヘンリエッテ・ウイルヘルミナ・ホフマイスターと
 結婚
 一八二六 『人の教育』出版
 一八二八 自伝（マイニンゲン侯への書翰）
 一八三〇—一八三六 ドイツ行
 一八三七 ブランケンブルヒに幼児教育所を開く
 一八三九 幼児教育所を開くため、ミッテンドルフと共に、ド
 レステンに赴く
 一八三九 妻の死
 一八四〇 ブランケンブルヒに、全独幼稚園を開くために赴く
 一八四三 『母の歌愛撫の歌』出版。
 一八四八—一八四九 ドレスデンに幼稚園教師養成科を開く、リーベンス
 タインに定住、幼稚園教師養成科を開く
 一八五一 再婚
 一八五一 幼稚園禁止令
 一八五二 死去（六月二十一日）



フレイベル百年記念特集號に序して

日本におけるフレイベル研究を顧る

本誌編集主幹
日本幼稚園協會會長
日本保育學會會長
全國保育連合會顧問

倉 橋 惣 三

本年はフレイベルの逝去（一八二五年六月二十一日）後百年に當る。世界各地においてその記念行事が行われるであらう。日本幼稚園協會もフレイベルに対する衷心の敬慕を以て他の友好諸団体との共催によつて六月二十三日、お茶の水女子大学講堂において、その記念講演会を開くと共に、機關誌『幼児の教育』六月号（第五十卷第六号）を以て、その特集号とする。本会の乞いを容れて、寄稿を快諾せられた広島大学教授文学博士長田新、同大学助教授莊司雅子、頌栄短期大学講師水野浩、お茶の水女子大学講師津守真の四君に、フレイベル尊敬者の名において、その好意を深謝する。長田新君は、日本教育学会會長として、我国教育学の權威者であると共に、フレイベル研究に就ての耆宿である。莊司雅子君は久しきに亘るフレイベル專攻の權威者である。水野浩君と津

守真君とは、共にフレイベル研究における、眞摯な新進学徒である。本誌は之等四君の、フレイベルに關する蘊蓄と、研鑽と、特にこの世界教育界の偉人に対する熱情の文章を以て、本誌を飾られ、特集号の実を挙げ得たことを誇りとする。就ては、編集者としての喜びに促されて、余も亦フレイベル尊重の一老学徒として、日本におけるフレイベル研究の跡を顧みつゝ、四友の玉篇を、汚がさざる程度の短文を以て、序章とすることも、特集号の名の下に、寄稿四君と本誌々友諸君の寛恕を冒瀆するわざでもなかるう。これ亦、フレイベルの功業を、我国において讃稱する一つの途でもあるうか。

近藤眞琴の「子育ての巻」

日本に初めてフレイベルの名の伝えられたのを、文獻的に

進れば、近藤真琴著『子育ての巻』（明治八年）が古い。但し、海外の新知を求めに急であつた明治初年のこととして、当時の新文化人の間に、如何なる先駆者があつたかも知れない。すなわち、これを以て日本におけるフレイベルの名の称された最初と断定する訳でもないが、この明治八年（西暦一九〇〇年）は、フレイベルの逝去（一八五二年）からも、ブランケンブルと幼稚園の創設（一八三七）から数えても、随分早いことと言わねばならない。近藤真琴は天保二年江戸に生れた鳥羽の人で、早くから蘭学を修め測量学に通じ、幕府及び明治政府の海軍教育たること前後二十五年、明治二年公暇を以て攻玉舎（後に海軍予備校として有名）を起し、尋いで海陸の測量研究所を設け、盛んに子弟を教育した。新文化の先進者である。その人が明治六年オーストリアのウキーンで開かれた万国博覧会に出席したとき、そこに出品されていた幼児教育の状況を紹介して著わしたのが、この『子育ての巻』である。その時、氏の紹介し、これを我國にも実現しようとした（実現されなかつたが）育幼院は、明治八年京都柳池校に設けられた『幼稚遊戯場』と共に、必ずしも幼稚園の創めとはいへないとするも、その概則の書き出しに、『惻に聞五洲中文運隆成ヲ以テ称セラレル日耳曼地方ニハ大小費ノ外数所ノ遊嬉場アリテ学龄未滿ノ稚児ヲ出シ遊嬉娛樂ノ中ニ於テ発明ノ能力ヲ誘導シ……』とあるところから見て、ドイ

ツの實際を範としたもので、その社会施設性性質は、寧ろ児童事業であつたらしいが、フレイベル方法の影響を否定することはできないであらう。殊に『子育ての記』には育幼院の他にフレイベルの童子園（キングダールテルの訳）のことが記してある。後にこの子育ての巻のことを書いている、石井研堂の『明治事物起源』に、『幼稚園は日耳曼フレイベルの首唱せしものにて……』とあり、そこにフレイベル精神は紹介されてきたものといえる。殊にフレイベルが幼稚園の名を用いる前に、その事業に幼児を遊嬉で教育するところ（幼稚遊嬉場）という意味の名でよんでいた事実なども、このウキーンにおいて近藤氏の見で日本に伝えようとしたものと、フレイベルとが素より関係のあることが信じられるのである。更にもその遊嬉場で用いた教育用具が、フレイベル恩物であるところからも、その関係が認められる。とにかく、幼稚園の名において正面（？）から迎えられる前に、その何年か前から、フレイベルは日本に来ていたものといえる。

フレイベル主義幼稚園ニクララ女史

フレイベルの心の底、頭の真髓からの名称といつていへキングダールテルの直訳の幼稚園の名を以て、フレイベルが日本に迎えられたのは明治九年（一九〇一年）東京女子師範学校附属幼稚園（後に東京女子高等師範学校附属幼稚園、今のお

茶の水女子大学幼稚園)の設立の日からである。それは第一に、設立の因が、後の文部卿田中不二麿が明治四年文部省理事官として欧米各国の教育事務を検討した結果であり、時の女子師範学校攝理(校長)中村正直が幼稚園創設に力をつくしたことによる。そして、その幼稚園と保母練習科とに迎えられた松野クララが生国ドイツにおいてフレibelの直伝の生徒であつたことは、日本の幼稚園の第一歩がフレibel主義に導かれたこと、すなわち、当時の幼稚園教育の研究が一つにフレibel研究であつたといえる。現に附属幼稚園最初の保母であつた豊田ふゆが、クララ女史の講義を筆記した手記『恩物大意』や、明治十一年保育実習のため同幼稚園に入學した氏原銀の筆記『幼稚園手引』によつてもそれが明かである。当時の幼稚園の研究は、皆フレibelの保育原理とフレibel恩物使用法であつた。

手記類の他に、明治九年文部省刊行の、桑田親五の『幼稚園』東京女子師範学校刊行の関信三の幼稚園記、同十二年青山堂刊行の関信三の『幼稚園法二十遊嬉』等、フレibelの著述のまゝの訳ではないが、いずれも、フレibel説そのものである。これらの殊に、明治九年の米國フイラデルフィヤに開催せられた博覧會に、我國文部省から『日本教育史略』と併せて、箱入りの幼稚園恩物が出品せられたことは特筆されるべきである。

かくて、明治初期の幼稚園研究書類が、フレibelに就ての述作、解説の書物の翻訳が主であつたのに対して、フレibelの著書の直接の訳書も出るに至つた。

フレibelの幼稚園ハウ女史

こゝでフレibel直伝の使徒クララ女史と共にフレibelの保育精神と保育方法とのうえつけ者の最重要な一人として、神戸頌栄学園(現頌栄短期大学)のエイ・エル・ハウ女史に就て語ることを忘れてはならぬ。ハウ女史はアメリカのボストンの人、若くして保母練習所に学び、明治二十年(一八八七年)米國伝道会社婦人宣教師として日本に來り、明治二十二年(一八八九年)頌栄幼稚園設立と共にその園長の任に就いた。熱心なる基督者であると共に、フレibel主義に最忠実なる幼児教育者であつて、フレibel精神を以て頌栄学園を重きにおいたのみでなく、その保母練習所を通して、日本にフレibel主義を普及せしめる大いなる力となつた。その感化も亦深い。ハウ女史は多くの保育関係書類を著わしたが、フレibelの主著『母の遊戯及育男歌』の翻訳(明治三十年)刊行と、同じく第一主著『人の教育』の翻訳(大正十四年)とは、我國のフレibel研究に貢献した功績極めて大きく、厚く感謝されているところである。殊に『母の遊戯及育男歌』の刊行には、歌詞に大和田建樹、松山高吉の助け

を借り、挿画は獨逸原版の精神を体して、日本風俗に描きかえられてある等、苦心が拂われていることは、その意の存するところ敬意を禁じ得ない。

フレーベル著書の翻譯

フレーベル自身の著書の翻譯については、ジャパン・キング・ダーカルテン・ユニオンの『母の歌と愛撫の歌』（大正十三年岩波書店）と、小原国芳の『フレーベル・人の教育』（昭和四年イヂヤ書院、長田新の『フレーベル自伝』（昭和十二年岩波書店）がある。

『母の歌と愛撫の歌』は Die Mutter und Kose-Lieder の翻譯であり、玉成保姆養成所長ベラ・アルウンの企劃に基き、歌詞は獨逸文学者茅野蕭々の訳により、絵画は倉橋がプランケンブルヒのフレーベル博物館から譲り受けて持ち帰つた初版本を、岩波店主故岩波茂雄の古典尊重の精神によつて、原版に忠実に複製せるもの、ブリーユーフェルの跋文をも添えた、上等紙大版百九十三頁の堂々たる大冊である。恐らく世界に唯一の良翻譯であると思う。殊に歌詞の古き獨逸語は、訳者の如き獨逸語の大家によつて始めて誤訳なきを得るもの、フレーベル研究者にとつて至宝といふべきであり、岩波茂雄君の犠牲的刊行に銘謝しなければならぬ。

『人の教育』は Menschenenerziehung の全訳であつて、

この難解といわれるフレーベルの著書を、チンメル版とレクタム版を参照しあわせて、正確に達意の文章によつて訳せるもの、小原国芳君が前の成城学園長、現在の玉川大学学長として、ヒュマニスムスの教育者としての盛名は世の知るところ、この貴重な古典的教育書を、日本語を以て精読し得ることとは、フレーベル研究者の至幸である。

『フレーベル自伝』は、今日、原著は日本においては勿論ドイツにおいても容易に入手し難いものを、長田君が、初めエミール・ミカエリスの英訳によつて二十余年前に訳し、更にライプテツヒのコメニウス図書館においてその原著を入手することを得、一半をライプテツヒに、後半は帰朝後に訳したという苦心の結晶である。昭和十二年岩波書店から単独の書として出版し、昭和二十四年更に改訂を加えて、岩波文庫の一部として刊行フレーベル研究者を容易に満足させることになつたのは、重々の幸である。長田博士が、広島大学教授として、又日本教育学会会長として、我国教育学の權威であることは更めていうまでもないが、ペスタロツチ研究者、フレーベル研究者として特に著名である。『フレーベルに還れ』の著書は、フレーベル精神の強調せるものとして貴重すべく、その中に收められてあるフレーベルの遺跡めぐりの美しき文章はフレーベル研究者必読の名品といつてよい。尙、序に一言を添えれば、此の書の倉橋惣三訳が、大正三年、フ

レーベル会（今の日本幼稚園協会）の『婦人と子ども』（今の『幼児の教育』）に一年間連載されているが、ミカエリスの英訳によつたもので、訳出の時期は早い。長田訳が原著によつてゐるオーソリチーは一段高く評価さるべきである。

かくて、この三つのフリーベル主著の全訳は日本のフリーベル研究に、大いなる光輝を与えるものである。又、それぞれの訳者皆その人を得ていることにおいて、日本のフリーベル研究に対する貢献をたゞえなければならぬ。

フリーベルの評傳

フリーベルの評傳としては、長田訳の『フリーベル自傳』は格別として、大正四年倉橋訳によるフリーベルの知己的同調者マレンホルツ・フォン・ビュロー女史の『フリーベル追憶録』が、フリーベル会発行『婦人と子ども』に、一年間を通じて連載せられたのと、岩村清四郎訳ブレイクの『フリーベル伝』（大正六年、頌栄学園）と後藤真造著『教育者としてのフリーベル研究』（昭和五年目黒書店）と、小川正行（今の奈良女子大学幼稚園主事小川正通君の父君）著『フリーベルの生涯及思想』（昭和七年目黒書店）と、及び倉橋惣著『フリーベル』（昭和十四年岩波書店、『大教育文庫』の中）と、前記、長田新著『フリーベルに還れ』（昭和二十五年、フリーベル館）とがある。又莊司雅子著『フリーベルの

教育学』（昭和二十五年・フリーベル館）は書名に明かならなく、フリーベル教育学の詳細な体系的著述として、名著である。莊司女史のフリーベル研究は、今までの久しい業績においても、将来の期待においても極めて大いなるものである。此の他、教育学殊に教育史の諸書中における、フリーベル研究の好資料は少なくないと信するが、恐らく一々挙げるに違ないであらう。その一つとして、シュプランガーが、東京女子高等師範学校で行つた講演『国民教育者、婦人の教育者としてのフリードリッヒ・フリーベル』が、シュプランガー著『現代文化と国民教育（岩波書店）』に収録されてあることを特記しておく。——尙、最近の論文として、莊司雅子氏の『フリーベル教育学に於ける労作の構造』が、広島大学教育学研究室編『教育学科学』第八卷（東京・理想社発行）に發表せられてゐる。

むすび

以上、甚だ粗雑な記録であつて、尙お貴重なるものの遺漏なきやを恐れる。その点深くお詫びしなければならぬが此の特集号と記念講演会とを加えることによつて此の短文を飾り得ることは幸である。

（昭和二十年四月記）

フレーベル教育學の根本問題

—いざや吾等を吾等が兒童に生きしめよ(フレーベル)—

日本教育學會會長
廣島大學教授
文學博士

長 田 新

一 幼兒の發見

幼きものの魂を醇化し育成することが人間形成の上に最も大きな意味を有つことに就いて、真に正しい理解を有つていた者はフレーベルである。單に正しい理解だけではなく、その理解の上に立つて七十一年の長い生涯を「幼き者のために生き」抜いたのが彼である。そういう偉大な教育者の生涯と思想とに就いて知ることが、今日全く救済的の意味があるではあるまいか。というのは古代においては「起始は如何なる仕事にあつても最も必要な部分であるが、取りわけ若く軟かい事物の場合においてそうである。何故かと言えばそれ

は性格が形作られ、思うままの印象がいつも容易く与えられる時だから」と、あの『理想國』の中に言つてるプラトンがあつたにも拘わらず、また近世初頭には「人間は幼き時代を外にしては真には形成されるべくもない。人間が人間にまで形成されるために、神は人間に教育以外の何事にも適さない若い年を恵み与えてある」と、あの『大教授學』の中に言つてるコメニウスがあつたにも拘わらず、幼きものの魂を育くむことの有つ高い正しい意義に就いては、今日の教師も親もその知るところが余りにも乏しくまた余りにも浅い。その証拠には幼児は教育の対象ではなくて、養育という言葉の低い動物的な意味の仕事の対象としてさえ今尙お一般に考えられてるではないか。併し思えば事柄は嘗て道元禪師が「學道用心

集」の中で「発心正しからざれば万行空しく施す」と言つたほどの意味があるだけではなくて、華嚴經に言うように「初発心時便成正覚」とさえも言い得るほどの深い意味があるではあるまいか。而も幼児の教育がこのように深い意味を有つことは、一方ことの困難をも必然に伴う謂でもあつて、さてこそ龍樹をして涅槃心経の中に「発心畢竟二無別、如是二心先心難」と嘆ぜしめたではないだらうか。而もフレイベルの全生涯と全思想との有つ意義は、この困難な仕事に対して世の教育者の取るべき態度を、彼れのような浪漫主義の哲人ならでは出来ないような独自の仕方ですぐに説き教えたところにある。少なくとも彼が詩の世界から聖の世界に幼きものを導き行こうとした『母の歌と愛撫の歌』の企図するところの如きは、浪漫主義者ならでは説き教えることの出来ない天地を切り拓いたものではあるまいか。恐らく人類教育の広野において尙お処女地として残されていて、而も三千年の教育的努力が歟を入れた総ての既耕地よりも、とさえ言いたいほど広くもあれば多量でもある教育の野は幼児教育ではあるまいか。「幼児の発見者」でもあれば世界における幼稚園の最初の創始者でもあるフレイベルの百年祭に當つて改めて吾等も彼に学ばうとするのもこのゆえである。

二 敬 の 教 育

フリードリヒ・フレイベルがチューリンゲンの森の中の一寒村オーベルワイスバハに呱呱の声を挙げたのは一千七百八十二年春附な四月二十一日のことであるが、この第十八世紀という世紀は「哲学の世紀」とも呼ばれ、特にその後半から世紀末にかけてはヨーロッパの全文化が濃厚な哲学の鬱閉気に包まれた時代で、危篤の病床を訪れた友に向つて「余の健康なんか話題にし給うな。僕達の間にはただ永遠なものがあるだけではないか」と叫んだ人さえ出たような時代である。恐らく人文価値がこの時代ほど鋭く批判され、豊かに生産され、深く鑑賞された時代は他に見附けることが出来まい。時代のこうした一般的精神に培われて、人間教化の世界にも偉大な教育思想家が次から次へと輩出して「哲学の世紀」は纏てまた「教育学の世紀」でもあつた。この「教育学の世紀」に輩出した教育思想家のうちでは人は先ず指をルソーとペスタロッチーとフレイベルとに屈せずばなるまい。ルソーを以て人間教化の久遠な道を示した予言者とするなら、独自の性格を以てこの予言を体験したものはペスタロッチーであり、ルソーの予言したもの、ペスタロッチーの体験したものを、哲学的思索の深味に持ち来して新たな試練を加え、それ

を基礎として幼児教育の新世界を開拓したのが今吾々の問題としてゐるフレーベルである。

フレーベルの時代は周知の如くドイツ理想主義哲学の最高潮期だつた。彼れの誕生はカントが『純粹理性批判』を公けにした一千七百八十一年の翌年だつた。カントはフィヒテ、シェリング、ヘーゲルという三大使徒を生んだが、フレーベルは一面精神と自然とを實在の両極と見るシェリングの「同一哲学」に心酔しつつ、他面絶対を神的なものと見るヘーゲルの思想を攝取した。主著『人間教育』の中でフレーベルはこうした立場を明らかにした。彼に言わせると、万物のうちには永劫の理法が働いていて、それが万物を支配している。万物を支配するこの理法は万物に普遍的に働きかける生命のある自覺的な統一力に基礎を有つてゐる。この統一力が神で、その神から万物は生じて来た。だから万物はただ神において自己の存在を見出す外はない。而も万物のうちには働く神的なものが万物の本質である。こうした自己の本質を表すことが万物の使命でもあれば万物の仕事でもある。このようにしてフレーベルは吾々人間の特有な使命乃至畢生の仕事を「自己の本質、自己の神性、従つて神とそして自己の本分、自己の職分そのものを十分に意識し、生き生きと識認し、明らかに洞察し、そして自己決定と自由とを以て自らの生活の中にこれを實現し活動させ明瞭にするにある」とした。総じてフレ

ーベルにおける自然觀・象徵主義さては事物に対する美觀見解はこれをシェリングに負い、倫理的的人生觀即ち人格・意志・義務等の思想はこれをフィヒテに承けたとも言ふことが出来る。フィヒテが彼れの親友の一人であつたということ、一千八百十七年に迎え二十年一日の如くフレーベルの畢生の事業に内助の功を積んだ最初の夫人ウイルヘルミーネがフィヒテの薰陶を受けた才媛であつたということ、更にフレーベル自身の告白にも明らかなるように、フィヒテの著作はルソ、ペスタロッチ、パーゼド等の著作と相並んで特に彼れの愛読書の一つであつたといふことなどから推しても、フレーベルにおけるフィヒテの影響は大きかつたらう。けれども人間の使命をそのあらゆる勤勞乃至作業を通じて自己のうちに秘められた神性を顯現すると見たフレーベルの立場は、自然を以て絶対または神の理性が無限に多様な個物を創造する過程と見たヘーゲルの立場とも相通する。このようにしてフレーベルの著作を読む者は、誰しも恐らくカントから發展して来たドイツロマンティックの哲学、特にシェリングやフィヒテやヘーゲルの思想が到るところに浸透してゐるのに驚かされるだらう。教育史上におけるフレーベルの功績は、第十八世紀の後半から第十九世紀の初頭にかけて發展したドイツロマンティックの思潮をなみなみと汲んで来て、人類教育の曠野に灌漑した点にある。

惟うに人間教育の仕事は個々特殊の方法以上の何ものかに依つて靈化されなくてはならない。勿論方法なしには方法以上のものを表わすに由もないが、併し方法は常に方法以上のものに依つてのみ生命を付与される。それが教師その人の抱懐する世界観に基礎を有つ教育の理念である。従つて教育者は自己のうちに必ず理念の深淵を湛えていなくてはならない。うちに理念の深淵を湛えていない教師や教授や訓練は工場における齒車の廻轉にも異ならない。而も方法が單なる方法に留まつて機械化し形式化するところに教授や訓練の病弊がある。だから方法は方法以上のものに依つて靈化されなくてはならない。ところがフレーベルの教育学は吾々をして常に具体的な一々の教育作用の意味を深く反省させ、遂に宇宙の究極原理に復歸させる。彼れの強味はここにある。崇高な世界観はフレーベルを通じて吾々教育者の一々の仕事に生命と魂とを付与せずにはおかない。このようにして彼れの主著『人間教育』は吾々教育者の聖書である。恐らく人は彼れの『人間教育』を読んで児童の前に立つ時、思はず襟を正し、敬虔の念のひしひしと胸に迫るを禁じ得ないだろう。

周知の如く人間の教育は愛の仕事であつて、同時にまた敬の仕事でなくてはならない。而もペスタロッチが「愛の教育者」であるなら、フレーベルは「敬の教育者」であると言つていい。愛と敬とは教育活動の成立する二個の人格的な基礎

原理である。ところが人類の教育史上において愛はペスタロッチに依つて代表され、敬はフレーベルに依つて代表される。勿論ペスタロッチに敬の原理がなく、フレーベルに愛の原理がないなど人は言うべきではなくて、愛と敬とは互いに關聯して此等二人の思想の基礎になつてはいるが、併しそれにも拘わらずペスタロッチ教育の基調が愛であり、フレーベル教育学の基調が敬であるということは拒み得ない。今右二原理のうち特に敬の原理が有つ重要な意義は、愛の原理がその主観性のゆえに吾々各自にあつて如何に精進しても遂にその境地に到ることが困難であるのに、敬の原理は対象の真相を究め知る努力の結果そこに到達することが出来る。周知の如く愛はそれの有つ主観性のゆえに外から強いことは出来ない。愛せと言われて愛せるものでもなければ、愛そうと思つて愛せるものでもない。だから教育愛の如きは如何に世に有り難き原理であつても、人が例えばペスタロッチにその好き例を見るような天来の人格者ならでは如何ともなし難い場合が少なくない。そう考えて愛の原理は決して普遍的のものではあり得ない。ところが敬の原理はこれとは違つて、吾々の努力の結果としても屢々招采される。敬も固よりそれが感情という主観的な一個の意識ではあるが、併し實在の真相を究め知るところに展けて来るといふ意味で、言い換えれば知性を基礎として生起するといふ意味で、

にも永遠者の姿を看取し得る吾々は、神の似姿である人間の子において愈々永遠者の姿を看取して敬虔の念に燃えるに難くない。而も真にこの間の消息を明らかにしようとする者は誰よりも先ずフレーベルに行くべきではなからうか。コンコードの哲人エマースンも「教育の秘訣は児童を敬するにあり」と教えている。而もフレーベルの全教育学こそこの敬の精神に終始している。

三 創造的自己活動

教育作用における児童の位置を高く評価する傾向はアメリカのプロジェクト・メソッドやコーア・カリキュラムも俟つまでもなく第十八世紀の時代思潮の一つであり、従つてルソーやベスタロッチやフレーベルにおいて吾々はこの傾向の最も典型的な場合を見附けるが、その最も徹底したものは吾々がフレーベルだつた。言うまでもなく児童は彼れの教育学の主体であつて、「児童のうちに未来の種子がすべて秘められてゐる」とは有名な彼れのモットーだつた。而もその種子を要するに神性と解し、無限なものとして解し、絶対と解した彼は、児童を重んずるといふより寧ろ児童を畏れ敬した。従つて児童研究の動機もフレーベルにはフレーベル独自の意味があつた。というのは普通の世の教師は児童のためになすべきこと

を学ぼうとして、詳しく言えば児童は如何なる教授を受くべきか、児童は何時また如何に教授を受くべきかを学ぼうとして児童を研究する。ところがフレーベルの児童研究の動機は、飽くまでも児童自身の自己發展を助けるためだつた。児童における精神的道徳的覺醒の過程を明らかにし、児童が自らその環境に親しみ社会關係に入るその仕方を明らかにして、總ての教授訓練を児童の自己發展の自然の過程と調和させるために彼は児童を研究した。だから世の教師は自分が教授するために児童を研究し、フレーベルは児童に学習させるために児童を研究した。教授法の研究は教師を主体とする旧教育学の遺物であり、学習法の研究は児童を主体とする新教育学の中心課題でなくてはならない。この新教育学の中心課題を明らかにしたのが近世教育史上におけるフレーベルの功績である。教育が児童のための仕事であることは言うまでもない。フレーベルは教育を単に児童のための仕事としたのではなくて、實に児童に依つて、また児童を通じて成し遂げられる仕事とした。このように考えると、フレーベルの教育思想は現代乃至最近における教育改革運動の導火線だつたと同時に、第十九世紀の中葉以後独裁的の支配力を有つてたヘルバルトの教育思想と著しくその趣を異にしたとも言ひ得よう。というのはヘルバルトは教授に重きを置いたから自然教師の活動に重きを置き、フレーベルは自己活動に重きを置き

たから自然児童に重きを置いた。ヘルバルトは教授に依つて道徳的品性を築き上げようとし、フレーベルは児童の活動力を發揮させることに依つて自ら性格を創造させようとした。

ヘルバルトは教授と教師とを重んじたからまた觀念の整理に忙しく、フレーベルは自己活動と児童とを重んじたから觀念の整理よりは感情や意志を重んじた。これカントを棄てて觀念力学説に走つたヘルバルトと、カント及びカントに發する独逸ロマンティックの使徒だつたフレーベルとの間に必然生ずべき間隔ではなかるうか。

教育上児童の自己活動を重んずる傾向は、先にも述べたやうに第十八世紀の哲学、わけてもライブニッツの单子論などに培われて、その後の教育思想を一般的に支配したが、この傾向はフレーベルに到つて徹底した観がある。言うまでもなく自己活動とは自己の動機に基づく、従つて自己の興味と自己の能力とに支持される活動の謂である。而も精神生活の發展がこのように内面的に基礎付けられる時教育の目的が達成される。こうした活動はもともと人間個有の天性に基づいてから、それはまた自由でもある。各自が外部の力ではなくて自己の天性の中に感得される力に従うから自由である。而もその活動は天性に基づく法則に従つて起つて来るから自由であつて、而も教育活動指導の意味を有つてゐる。このようにしてフレーベルにあつては教授訓練の一切の過程は児童の興

味から来るとも言われよう。興味とはもと自己發見の喜びである。真善美の可能性としての各自の天性が文化活動乃至教育生活において自己を發見するところに興味が起つて来る。

だからフレーベルにあつては児童の教育は凡そ児童の未來の生活に對する準備などではなくて、教育即生活となつて来る。抽象された遠い後年の大人の生活を抽象し縮寫して来て、それを児童に強いるのが教育ではなくて、児童は飽くまでも自然な且つまた眞実な生活を満喫すべきで、そうすることに依つて児童は立派な大人になる。而もここにはフレーベル教育学の根本原理の一つと言つていい彼の連続律が予想される。というのは彼に従えば人間の發展が或る一点から連続的に進行するものとして認められることは人間の全教育に取つて極めて重要である。だから人間の發達に嚴密な人爲的の境界や区劃を設けて、生命ある連続發展を阻害することがあつては由々しい大事である。フレーベルは言う。「幼年・少年・青年の各時期の要求が、彼に依つて忠実に拡充されることに依つて初めて人間は大人になる。……世の両親達は幼児が早くも少年または青年として自らを示し始むべきことを要求するだけではなくて、更に特に少年が少くとも自己を大人として示し、總てその行動において大人と同じかるべく、従つて少年期と青年期とを飛躍することを要求する。」「このことを要求する世の親達は、彼等自身も常にただ彼等が彼等の

本性に従い、一定の關係に依つて、種々の段階を生活し抜くことに依つて、またその限りに於いて役立つ両親にもなれば、また役立つ人間にもなつたということを見逃し、また打ち忘れたものである。そして両親が生活し抜いて初めて役立つ人間になつたその種々の段階をば、子供は両親の要求に従つて飛躍しなくてはならない。「幼年・少年即ち人間は一般に各々の段階において、この段階の要求するものであるより外には何等他の努力を必要としない。斯くする時各々の段階は健康な蕾から次から次へと新芽のように躍り出で、そして次から次へと表われて来る各段階において、同じ努力に依つて再び彼は此等の段階の要求するものを完成するようになるだろう。何故かと言えば各々の先き立つ段階における完全な人間發展のみが、よく続いて来る後の各段階の完全な十分な發展を実現し生み出すからである。」このようにしてフレibelは生命の連続發展観の上に立つて古い準備主義の教育を打破し、教育即生活論を提唱した。生命の連続發展観や準備主義の打破や教育即生活論は決してアメリカなどの所産ではなくて、人はその最も徹底したものをフレibelの教育説に見ることが出来る。

一千八百二十五年カイルハウにフレibelの学園を訪れた一学務官の手記にはこうある。「精神の自己發展はこの教育の第一原理である。生徒の精神を一個の強固な箱と考へ、社

會に通用する大小諸種の貨幣を出来るだけ多く年少の間に蓄積しようとするが如きはこの教育の目的ではない。その教育は徐々として連続的に、漸進的に、且つまた内面的に發展し、言い換えれば人間精神の本質中に見出される關係に従つて發展し、その間何等の技巧を用うることなく、簡より繁に、具体より抽象に向つて確乎たる進歩を営む。そのよく兒童の性質に適い兒童の要求に合してゐることは、兒童が学習と遊戯との間に何等の逕庭をも感じてゐないことでも明らかだ。」

このようにして兒童の自己活動はフレibel教育学の中心原理であつて、自己活動に対する彼れの信念とその大胆な適用とは彼れの教育学の最も顯著な特徴だつた。勿論自己活動の原理を教育に導き入れた者は彼以前決して少なくない。けれどもフレibelほどこの原理を大胆に且つまた徹底的に主張もすれば実行もしたものはない。恐らく彼れの前にも後にも彼ほど深くこの原理を解した者はないだろう。或る人も言つたように若し世の教育者に依つてフレibelのこの自己活動の原理が十分理解されれば、現代の教育には更に大きな革命が起らなくてはならない。

フレibelが師として仰いだペスタロッチーもまた兒童の自己活動を重んじた。けれどもフレibelに至つてこの原理は一層徹底したかの觀がある。ペスタロッチー教育学の合言葉は周知の如く直観で、「直観は總ての認識の絶対の基礎」

である。彼は教育の一切をその直観に依つて基礎附けようとした。フレーベル及びその生徒は直観に依る教育は児童の自己活動を確保すると言つてペスタロッチを声援した。而もペスタロッチは知識の基礎として現実的な事物を使用して確實な観念を児童に与えようとし、フレーベルは寧ろ感覚や情緒を陶冶し、特に正しい自己活動に訴えて児童の性格を涵養しようとした。ペスタロッチの生徒は言語と手とに依つて物を観察し模倣したのに、フレーベルの生徒は寧ろ自ら観察し自ら創造した。ペスタロッチの生徒は再生的であり、フレーベルの生徒は創造的だつた。ペスタロッチの生徒は発表するように訓練され、フレーベルの生徒は自己発表するように訓練された。ペスタロッチは児童の生産活動に満足し、フレーベルは生産的な自己活動を要求した。ペスタロッチの理想は「余は児童に善きことをしなくてはならない」ということであり、フレーベルの理想は「余は児童を通じて善きことを發展させなくてはならない」ということだつた。このようにフレーベルにおいて児童の自己活動はその最高潮に達した。嘗てアメリカで強調されたプロジェクト・メソッドもダルトン案もドイツの試行学校の試みも、また最近のアメリカの新教育もフレーベルの教育法に比しては尙お甚しく微温的の感なきを得ない。

尙おここに附記すべきはフレーベルの教育学と彼が創始の

幼稚園とが世界の何れの國よりも最もよくアメリカに輸入され發展されたことである。恐らくそれはビュリータニズムに基礎を有つアメリカ精神と言つていいあのフロンテニアスピリット(開拓精神)と相通するところがあつたからではあるまいか。というのは前にも述べたようにフレーベル教育学の根本精神は児童の創造的の自己活動を重んずるところにある。そしてそれは彼が創始のあの恩物にも見られる。普通世間に行われてゐる遊具を児童の創造的の自己活動力を滅殺する藪蔭の毒蛇である嘗つた彼は、児童の創造的な自己活動を自由自在に伸ばすために恩物を作り出した。而もこうした創造的の自己活動こそ、広漠無辺の大自然に取組んで自己の自由な自己活動に依つて自己の運命と地上における人類の文化とを開拓して行こうとするフロンテニア・スピリットではあるまいか。言い換えるとフレーベルの教育精神とアメリカの国民精神とは符節を合する如く一致したのである。勿論デューイやキルパトリックの著作の中にはフレーベルの教育思想に対する批評もあるが、併しそれにも拘らず児童の自由と創造的の自己活動と更らには勤勞作業に依る生産活動を重んずる彼等の主張がそのままフレーベル精神であることは説明するまでもない。

四 勞働と教育

教育史上におけるフレイベルの功績の一つは勞作教育に対する彼の独自の主張である。勞作は古來種々の立場から主張された。周知の如く勞作教育に対するルソーの主張は彼がエミールに向つて「私はお前が茶碗に画をかく画家になるより、寧ろ道路に砂を撒く土工になつて欲しい」と言つた彼自身の言葉でも解かるように、社会的經濟的の立場だつた。ペスタロッチーはまた直觀主義の教授論から出發して実物研究乃至手工等を奨励したが、これは五官の活動を通じて知覚を完全なものにしようとする認識論の立場であつた。フレイベルはルソーにおいてのように社会的經濟的でもなければ、また必ずしもペスタロッチーにおいてのように知覚を完全なものにしようとするでもなくて、内的自我を外部に表現することそのことの有つ深い宗教的・哲學的の意味を認めた。「人間教育」の中で彼は言つてる。「万物の使命と職分とはその本質即ち神性を、従つて神性そのものを發展し、神を外界に、そして現實を通じて明らかにし顯現することである。知的な理性的なものとしての人間の特殊の使命・特別の職分は、自己の本質、自己の神性従つて神と自己の本分・自己の職分そのものを十分に意識し、明らかに洞察し、そして自

己決定と自由とを以て自己の生活の中にこれを実現し活動させ明瞭にするにある。」だから勤勞や作業は彼にあつては自己の本質・自己の神性を表現し發展する過程に外ならない。斯くて人が生きるとは勤勞や作業において自己を実現することである。勤勞や作業は彼にあつては人がその眞の意味において生きる道である。ところがフレイベルに言わせると「人は今日勤勞や作業に就いて虚妄な外面的な考えを持つてる。併しそこには深い宗教的の意味がなくてはならない。というのは人間がその肖像である神は不斷に創造しまた働き続ける。」「神の精神はまだ姿の定まらなかつた渾沌界に浮かび出て、これを動かした。そして石と植物と動物と人間とは形態と構造と生存と生命とを得た。神は彼自らの肖像である人間を創造した。神の似姿として神は人間を創造した。だから人間は神のように創造し、また働かなくてはならない。彼れの精神即ち人間の精神は形態も構造もない渾沌界に浮かび出て構造と形態、それ自らの本質と生命とを有つてるものを生ずるやうに働かなくてはならない。これが吾々が眞実の意味でまたその特徴を認めて呼ぶところの勞働と勤勞、仕事と創造との高い意味であり、深い価値であり、大きな目的である。吾々が仕事に依つて内的なものを外部に表現し、精神に形態を与え、思想に構造を与え、見えないものに見えるものを与え、永遠なもの即ち精神的生命に外部的な有限なそして現實の姿

を与えるという明瞭な思想なり、臆気な観念なり、乃至は直接的な生き生きとした感情なりを伴う勤勉と労働、仕事と行動とに依つて吾々は真に神のようになるのである。」而も思えば「天国はまた兒童のものである。何故かと言えば大人の街氣と狂氣とが兒童を妨げさえしなれば、兒童は無邪氣な信頼を以て吾が心のうちに働らく構成衝動と活動衝動とに嬉々として自ら帰依するからである。」フレーベルに依れば、「人はただその形骸である吾が肉体を維持するために労働するのではなくて、自己のうちに秘められてる精神即ち神性が外部的の形態を取り、斯くして彼れが自己自身の精神的な神の本質及び神の本質を認識するために創造するのである。これに依つて彼に授かる麵麩や住居や衣服は剰余でもあれば意味のない附加物でもある。だからイエスも言つてゐる。先ず第一に神の国を求めよ。」余が神の意志を行うことが余の糧である。「だから人間の眼には労働するとも見えない野の百合は、一切の彼れの榮華におけるソロモンよりも一層美しく神から着飾られてゐる。何故かと言えば百合は葉と花とを開いてゐるのではないか。而も総ての現れのうちに神を示し、神を現はし、神の本質を明らかにしてゐるのではないか。」「空飛ぶ鳥は人間の眼には時々とも見えず耕すとも見えないが、併し彼等はその唄う時、また巢う時、その各々の働きを通じて總ての様々な行動を通じて、神が彼等のうちに秘めてくれた

精神、その生命を表現するではないか。さればこそ神は彼等を養ひそして支えるのである。」

「晩鐘」「落穂拾い」さては「種蒔く人」の作者としての彼のミレーは、汝の額づく大地の間に詩と宗教とを見出せと教えたが、フレーベルは労働と作業とのうちに人間と精神と神とを見出せと教えた。現代社会の疾患は人間と労働、精神と物質との悲惨な分離と解体とである。だからパウロ・ナトルプはあの『社会的理想主義』の中で「総ての理想主義は社会的でなくてはならないし、総ての社会主義は理想的でなくてはならない」と説いて、現代の社会における人間と労働、精神と物質との痛ましい分離を統一しようとした。而もそのような教えを一百余年の昔早くも提唱したのが吾がフレーベルだつた。シェリングの同一哲学に基礎をおいた彼れの教育思想は人間と労働、精神と物質との統一を人間の教育に求めた。周知の如く現代教育の欠陥は理想主義に立脚する者は生きた現実の社会生活を忘れて超越的の態度に墮し、反対に現実の社会生活乃至職業活動に重きを置こうとする者は理想を失つて功利と実益とに墮する点にある。フレーベルは楕円の二箇の中心点にも比すべきこの両極を同一哲学の立場に立つて内面的に統一した。周知の如く産業革命以後の近代市民社会における生産機構においては労働は商品と化し、従つて労働者は人格を喪失した。そこに世界史の危機があり、人類の

終焉さえ予感される。そこでこの喪失せる労働者の人格を奪回することに依つて世界史の危機を克服し、人類の終焉を防止することこそは今日焦眉の急を告げる問題である。彼のナトルプはこの問題を解決しようとして『社会的理想主義』を著わし「社会主義は理想的にならねばならないし、理想主義は社会的にならねばならない」と叫んだ。吾がフレーベルは前にも述べたように既に第十九世紀の初頭においてドイツロマンティックの哲学乃至は自己の得意とする汎神論並びにエリングの同一哲学を基礎として、労働に宗教的の意味と価値とを附与することに依つて、喪失せる労働者の人格を奪回し、以て世界史の危機を未然に防止しようとした。こうした点にもこの予言者に学ぶべきものがあるではなかるうか。言うまでもなく吾等が今日フレーベル百年祭を祝うことは、一百年前に世を去つた彼に就いて昔嚳をするということであつてはならない。人類文化のために、人類教育のために、幼児の教育のために戦つたこの殉教の士の生涯を回想し、その説き教えたところを深く味い、以て明日の文化と教育とを新たに作る企図でなくてはならない。歴史を新たに作る上に彼を生かすことこそ「創造的自己活動」の福音を説いた彼を祭る謂ではあるまいか。

(一千九百五十一年四月五日)

参考文献

- 一、倉橋惣三著フレーベル
- 一、小川正行著フレーベルの生涯とその思想
- 一、莊司雅子著フレーベルの教育學
- 一、莊司雅子著恩物手引草
- 一、長田新著フレーベルに還れ
- 一、長田新譯フレーベル自傳(岩波文庫)

フレーベルの幼児教育論

— フレーベル百年祭を迎えて —

廣島文理大助教授 莊 司 雅 子

幼児教育の父フリードリヒ・フレーベルが世界の幼児に多くの遺産を残して世を去つて早や百年の歳月が流れた。この間時移り世変り教育は改められた。今フレーベル百年祭を迎えるにあたり、世の幼児教育者と共に静かに想いを彼の遺産に向けて見たいと思う。百年前にフレーベルが実践した幼児教育の原理や方法は今日から考えて果して如何程の現代的な意義を有つてゐるであらうか。それは全く時代遅れのものであつて、新しい心理学の發達せる現代においては何等取入れる価値がないであらうか。それとも今日いうところの新教育の精神や原理や方法は既に百年前にフレーベルがそれを開拓し、具体的に実践し、世代から世代へと改革され發展されて来たと解釈すべきであらうか。今日のアメリカ教育を支配し

ている碩学デュイイが、現代の教育がその重心を教師から児童へ移動したのは正に教育のコペルニクス的轉回であると言つてゐるが、吾々が叫んでいる新教育とはこのように重心を児童に移した教育を指すのではないだろうか。即ち旧い教育とは大人中心または教師本位の教育であり、新しい教育とは児童中心または生徒本位の教育であるといふ理解出来る。ところがその児童中心の教育を理論面においても実践面においても徹底的に、而も既に幼児期から行つた人、それこそフレーベルその人であつた。実際フレーベルは有名な彼の標語である「いざや吾等を吾等の児童に生きしめよ」(Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!)と云う一句が物語つてゐるように、幼児と共に生き抜いた教育史上の

第一人者であつた。

彼が身を教育事業に委ねてから実に四十数年の生涯を専ら子供に捧げ、彼と共に子供を生きしめ、子供と共に彼を生きしめた。恐らく彼程深く子供の姿を見つめ、身を以て子供を認識したものはなかつたであらう。彼は七十二年の生涯を終るまで涙ぐましいまでに子供の姿を見つめ続けた。或る時は母の腕に眠る幼児を見つめ、或る時は嬉々として遊ぶ学園の幼児を見つめ、また或る時は大自然の中に戯れる子供を見つめた。一寸した散歩の時にも仔細に子供の生活を觀察し、子供の生活を向上させることを忘れなかつた。そしてこのようにして子供と一心同体になつて生活し、そらすることに依つて初めて子供の本質を発見した。フレーベルの教育研究は子供の研究に終始したと言つても過言ではないであらう。それ程までに彼の教育学的思惟は挙げて子供の本質把握と密接に關係していた。否な寧ろ子供の本質把握から出発して彼の教育学は成立し、たま發展した。周知の如く世の多くの教育者は子供に何時また如何に教授を行うかを学ぼうとして子供を研究する。然るにフレーベルの子供の研究の動機は子供そのものの自己發展を助けるためであつた。然らば斯くしてフレーベルに依つて発見された幼児の本質とは如何なるものであらうか。

一、幼児の神性

フレーベルに依れば萬物の中には「永劫の理法」が秘められているから、吾々各自もまた永劫の理法をうちに藏しているものであり、従つて子供のうちにも永劫の理法が宿つている。而もその永劫の理法がやがて神性であるから、フレーベルの見た幼児の本性は神性そのものでなくてはならない。そして保育の仕事は子供の本性たるこの神性を開發することである。然るに神性は無限であるから、神性の開發を目的とする教育は子供において無限を無限ならしめる最も聖なる企圖でなければならぬ。フレーベルに依れば人間は地上に生まれ落ちると同時に、否な未だ生まれ落ちない時、即ち母の胎内に宿つている時から早くも永劫不滅の本質・神の魂・神の精神に従つて人間の形を取つて顕われ出でたる神的なものとして認められなければならない。即ち「神の愛の保証」として、神の親近者として、神の恩寵として、或いは神の贈物として認められ、育くまれなければならない。創世紀にもあるように神は自己の似姿としてまた自己の肖像として人間を創造したのである。従つて人間は既に誕生の刹那から、否な母の胎内にある時から神の神たる所以のもの即ち神性を秘めている。だから幼児の本質は謂わば神から發した一つの火花であ

り、神的なものである。新たに生まれた子供はフレイベルも言うように、恰も親木から落ちて来た成熟せる穀粒のようなものである。それはまた植物の花や樹木の花のようなものである。幼児は恰も人類にとつて一個の若い蕾のようなものであり、一個の新鮮な花のようなものである。一般に植物にせよ、人間にせよ、凡そ発育するものは発育の条件を自己のうちには有つてゐる。言い換えれば完成された全き人間となることは、子供の最初の出現と最初の眼ざしとのうちに決定されてゐる。恰も完成された花、完成された木になることが、既に花や木の最初の現われのうちに秘められてゐると同じようなものである。人間の子はフレイベルに言わせると、その本質のうちに既に自然的なもの、人間的なもの並びに神的なものの三つの要素を有つて生まれて来ている。而も此等の要素や芽生えの發展をば、人間の子は他の生類と違つて意識的に自ら企図するものである。そしてそれは先ず大人が自然界・人間社会及び神の世界へ子供を連れ込むことに依つてのみ行われるであろう。フレイベルが教育を常に自然と人間と神との関聯において考えたのもこのゆえである。彼に依れば人間は宇宙の一員として絶えずもつと自由に、もつと内面的に、またもつと精神的に、更にもつと心から融合することに依つて、初めて人間としてこの世において成し遂げようと熱望するものが成し遂げられる。そしてまたこのようにして初

めてこの世において獲得しようと努力してゐるものを獲得することが出来る。勿論人間は自己の欲求するもの、彼の本質の要求するものを追求するには飽くまでも自分の力で行わなければならぬし、またそうすべきである。併し吾々は人間としてただ一人でこの世に存在してゐるものではないし、またそうあるべきでもないし、事実一人で存在することは出来ない。吾々は家族・社会・民族・国家更に現在生存してゐる全人類種族の一員であるといふことを子供といへども予感し、やがてそれを認識するものであらう。一人の子供といへども総てのものと共にそれ自身一つの全体であり、更には全体を形成するものである。宇宙のすべてのものは吾々と共に一つの全体を形成してゐるが、それ自身としては更に一つの全体である。このように人間は全体の一部分であると同時に、それ自身一個の全体である。というのは人間は一方においては宇宙の一部であるが、他方においては一個の全体である。人間ばかりではなくて、宇宙の各部分は何等かの意味において全体を含んでおり、全体を反映し、全体を表現する一個の有機的全体である。例えば菊の枝を地中に挿しこんで置くと、そこから新しい植物全体が成長するが、これはその植物の全体が枝の中に含まれてゐるからである。植物において既にこのようであるから、況して神の肖像としての人間の子は尙お更のことである。というのはフレイベルに言わせる

と、人の子は人類の全体を包含しているばかりではなくて、創造主の本質——即ち生き生きとした創造的な本質、生命に満ち生命を生み出す本質、だからまたそれ自身統一している本質を自己のうちに有つているのである。吾々は先にフレーベルは幼児の本性を神性として発見したと言つた。併し神性とは普通人々が考へるような完全無欠なもの、絶対的なもの、だからまた外から何等作用を加へる必要のないもの、ひとりでに神の如くになれるもの、従つてそこには發展も進歩もないというような意味のものではない。言葉を換へて言うなら崇高偉大な全智全能であるとすると宗教的な意味に考へられてゐるような神性ではなくて、それはどこまでも右に述べたような創造的本質としての神性、即ち絶えずこの天地を創造してやまない實在、生命に満ち生命を生み出すところの實在としての神性を意味するものでなければならぬ。フレーベルの意味する神性をこのようなものとして解釈して、初めて彼の説き教へてゐる幼児の全本質を理解することが出来るであらう。

既に幼児を被造物として、神の似姿として、従つてその本性を神性として考察する以上、吾々は幼児をその誕生の刹那から全生涯を通じて一個の創造的な實在として考察し、取扱ひ、そして教育しなければならぬ。フレーベルに従へば神は創造的な實在であり、神の各々の思想は一つの仕事であ

り、行爲であり、生産である。神は永劫なる行いを通じ、また絶え間なき創造を通じ、更には永劫なる實在からこの地上の見得る時間的な諸現象の中に、自らを表わし、それに依つて神は自らを吾々に知らせ、神の本質を吾々に啓示し顯現してゐる。同様に神の似姿として神に依つて造られた人間も、フレーベルの解釈に従うと、既に幼児の時から自らの本質若しくは自らの生命を自らの生活に表わしてゐる。そしてこれは正に神の場合と同じように自己の活動や自己の行爲に依るのである。試みに幾分發達せる幼児の感官の働きを見ても人々はこの間の消息を知ることが出来るであらう。吾々は幼児の感官の働きを屢々単に外からの刺戟に依つて起つて来るものと解釈するが、併しそれは決して單なる外からの刺戟だけに依るものではなくて、実に内なる魂の作用に依つて起つて来るものである。このようにフレーベルは幼児の總ての生命現象や生命活動、その他感官や四肢や身体の活動はすべて幼児が自己の本質を生命の法則に従つて自由に發展させたいという衝動の現われであると見てゐる。従つて彼は幼児の生命の諸々の現象を常に最も内的なものと理解し、そしてそれを育むことに努力してゐる。子供というのは既に夙くから次のことを予感しているとフレーベルは言つてゐる。両親や大人は自己のためにただ単に外部的な生命の要求を或いは衣食住に依り或いは遊戯作業等の手段に依つて満たしてくるば

かりでなく、更に自分達の諸力や諸能力を伸ばしたり、内的生命を育くんだり心情や精神の要求を満たしてくれたりするよう千々に心を砕いてくれるものである。そしてこの最も内的なもの即ち自己の本質を保育することが両親や大人の唯一の目標であり究極の目的である。それ故若し子供の内面世界の保育において、両親や大人に依つて生き生きとした感情が子供の魂を満たすならば、その時子供はそれに依つてより高き生命統一の一部として自己を感じまた自己を見出すであろう。そうすれば両親に対する真実の愛と感謝、大人に対する尊敬と感戴とが更に子供の心情に芽生えて来る。子供というものは自己の生命を何よりも先ず一個の内的なもの、最も内的なものとして、また一個の統一せるもの、独立的なものとして知覚するものである。これは心ある母親や保育者であれば容易に証明出来るであろう。また如何に夙くから子供は彼の人間的の生命の微かな表現と共に、外的に身体的に与えられたものから内的に心情的に精神的に与えられたものを区別しようとしているかに人々は驚くであろう。或いは寧ろ与える人の心情を感じ、与える人の精神を知覚しようとしているかに驚くであろう。このように考えて単なる外面的な肉体に対する愛は謂わば子供の外的理解のためであり、それは単なる子供の身体的保育だけである。併し子供は自己の本性が高尙になればなる程、また自己自身を精神的に感ずれば

感ずる程、身体的に与えられるものには余り自己を結びつけないものである。

以上のように考えて、幼児の諸々の精神的な方向や關係は既に無意識的なそして無器用にさえ見える幼児のうちに秘められていくということがわかるであろう。若しそれが既に幼児のうちに宿つていないなら、それが幼児から發展して来る筈はない。若しまたそれが幼児のうちに宿つていなかったら、如何に聰明な母の精神でも子供の誕生の瞬間から子供の存在を理解し知覚するところの存在として、またそうすることの出来る存在として、子供を完全に取扱うことは出来ないであろう。一般に何か或る物への素質と萌芽とのないところには、この何か或る物も決して生まれることが出来ないし、また現われることも出来ないであろう。併し真にそれが幼児のうちにあることを信ずるならば、まず幼児に対して真に深い愛を有つていなければならぬし、また幼児の地位を自己の同じ水準に置くことが必要であろう。語を換えて言うならば、真に幼児に生き得る人間にして初めて幼児の眞の姿を把握することが出来る、幼児の一挙手一投足にも深い意味を見て行くことが出来るであろう。また斯かる人にして初めて幼児の行動や活動の有つ創造的な意味を解して、これを育くむことが出来るであろう。

二、幼兒の感受性

幼兒期の子供の感受性の強いことはフレーベルが既に『人間教育』の至るところに強調している。彼は更に幼兒期の特徴であつて、而も幼兒教育の重要な基礎附けとして大事な事柄を挙げて言つてゐる。それに依るとこの世に出たばかりの人間はちのみ子と呼ばれる。そしてこのちのみ子という言葉が十分その意味を示しているように、呑み込むことが実にこの時期の子供の殆んど唯一の活動である。というのは人間はこの時期においてはただ多種多様なものを外から取り上げ、そして自己の中に取り込む。即ち呑み込んだり見込んだりすることがこの時期の子供の本質である。これをフレーベルは「恰も物を専有しようとする一つの大きな眼のようなものである」と形容している。幼兒期が人間發展の現在及び未来にとつて重要な意味を有つのはこのゆえである。詳しく言うなら幼兒期において何等病的なもの、卑俗なもの、凡俗なもの、曖昧なもの、悪性なものを呑み込まない見込まないということとは、人間の現在及び未来の生活にとつて極めて大切なことである。だから周囲の者の眼差しや容貌は純潔で、不動で、確實で、信頼を呼び起し、信頼を養わなくてはならない。清澄な空氣、明るい光線、清潔な部屋は他のものが如何に貧弱

であつても常に望ましいものである。何故かといえれば前に述べたように、幼兒の全存在は恰も大きな眼のように、外部の印象に向つて開放されているから。而も幼兒期に呑み込んだもの、即ち若き日の印象は悲しいかな生涯を通じて殆んど取消すことが出来ない。吾々が自己自身を相手とする最も悲惨な戦は言うまでもなく、後年の最も不幸なそして最も悲痛な運命さえ、多くはこの時期の發達段階にその源を有つてゐるとフレーベルは叫んでいる。幼兒期の教育の重要な所以もここから明らかである。

このことは最近の進歩した心理学によつて明らかにされてゐるではないか。ドイツの形態心理学者コフカもその著の中で幼兒期において如何に多くのものが学習されるかを論証している。彼はこの期における精神及び身体の發達が驚くべきものであることを示している。彼は更に比較心理学の立場から幼兒期が学習の時期であることも強調している。このように考えてフレーベルが「幼兒の全存在はまるで一つの大きな眼のように外部の印象に向つて解放されている」と言つてゐる意味もわかると思う。アメリカの心理学者マーレイも『現代心理学の開拓者としてのフレーベル』という彼の著作が語つてゐるように、フレーベルの幼兒教育思想には既に今日の心理学の研究の結果が含まれてゐることを吾々に語つてゐる。ただフレーベルは当時にあつて此等の原理を科学的に

若しくは実証的に扱う代りに、当時の時代思想の影響に依つて、自ら体験したものを乃至幼児について親しく彼の觀察した事実を、思弁的に哲学的に表現したのであると解して差しつかえないと思う。

以上の考察から結局フレーベルは幼児教育上特に精神的な働き即ち彼のいう神性の教化乃至發達に重きをおいていことがわかる。勿論幼児期における諸々の精神現象は未だ固定した方向を有つたものではない。例えば幼児の描画の練習も決して將來の画家を目指すものではなく、また音楽の練習も決して音楽家たることを目当てとするものではなくて、其等は單に幼児の本性の各方面への發達を志向するに過ぎない。而もそれは幼児の精神にとつて必要な食物であり、謂わば一種のエーテルのようなものである。換言すれば人間の精神は力と強さとを得んが爲に、このエーテルを呼吸してその中に生活してゐるのである。而も神が人間に与え給える種々なる精神的素質は必然に種々なる方向に多様な姿として現われる。だから吾々は成長しつつかある幼児の心の裡にあるこのような多方面的な精神的傾向を徒らに抑えたり、壓迫したりすればその爲に幼児の本性は甚だしく毀損される。恐ろしく其等の諸傾向を切断して他の諸傾向を植え付け、若しくは接木することに依つて、將來の地上の幸福や心の平和や天上の祝福を幼児に招來し得ると考えるが如きは、幼児の本性を傷つけ

ること甚だしいと言わなくてはならない。人のよく知るように神は接木も挿芽もし給うものではない。だから人間も亦神の如く決して接木や挿芽をしてはならない。神は永劫の理法に従つて最も微細なもの、最も不完全なものをも次第に發展させ給う。フレーベルは自然における神の働きを人間は學ばなければならぬと叫んでゐる。而も神性こそは吾々の思想に對しても行動に對しても最高の目標でなければならぬ。だから世の両親や教師はその子や生徒に對して神が人間に對すると同じようにしなくてはならない。而もこのように眞に人間として教育された幼児は、纏て社会生活上のあらゆる要求や必要にも十分応じ得るといふことを人々は知らなければならぬ。ところがそれとは逆に幼児期の教育が忽がせにされ等閑に附された子供は、その生涯を通じて自己の健全な精神發達をはかることが出来ず、従つて社会の要求にも必要にも十分応じることが出来ない。既に述べたように人間の全生涯を通じて痛み続け、永久に癒やすことの出来ない傷がひと度吾々の心に固着したら、それは最早や決して癒やすことが出来ない。また吾々の心の裡の高尙な感じや思想がひと度吾々の精神から消え去ると、精神のうちに忽ち暗い場所が生じて、どうしても明るくすることが出来ない。此等のことを世の人々、特に世の親達は心に留めて置かなければならぬ。人々は若い時代特に幼年時代に指導を誤られた爲に受

けた一切の傷を蔽い隠すことは出来ない。幼年時代に抑圧され、萎縮され、また全く枯らされた高尚な萌芽をば、人々は己が心のうちに見ようとはしないのであろうか。吾々は或いは重要な地位を社会に占めることもあるうし、また大規模の職業を営むこともあるう。また利益ある事業に従事することもあろうし、高尚な上品な社会的教養を楽しむこともあるう。併し如何にこのような恵まれた境遇にあつても、吾々が独り靜かに自己を眺めた瞬間に、吾々の心眼に映ずる自己の内面的教養の欠陥や分裂を吾々は如何ともすることが出来ないであらう。幼年時代の教育の不完全乃至未完成から来る此等の欠陥を吾々の地位や職業が取消し得るのであろうか。このように考へて若し吾が子を有爲な人間にしようと思ふならば、たとえ吾が子が少年期に達していても幼児期に修得しておくべき筈のものを學んでいない場合には、吾々は是非とも子供を幼児期に立ち戻らせなければならぬとフレーベルは言うのである。斯くして彼等が尙も爲すことの出来るものは怠らずつとめさせ、まだ取返しのおつくものは取返させるようにしなければならぬ。このようにすれば子供達はたとえ一年二年遅れても必ず目的地に達するであらう。言ひまでもなく彼等が誤つた目的地点に達するよりは、一年二年遅れても眞に正しい目的点に達する方が賢明である。一般に人々は自己の爲にも子供の爲にも幼児期から非常に多くを學び得るにも拘

らず、自己の幼年時代を反省し吟味することを輕視してゐるではないだらうか。そこでフレーベルは人々に次の如くに叫びかけている。「汝等自らの幼児期へ立戻つて、よく注意して見よ。そして汝等の心情における永遠の幼児期を呼び覺まし、これを温め生かすようにせよ。而もこうした要求は「爾曹嬰兒の如くなれ」というイエスの言葉の意味するところのものであるだらう。

三 幼兒の教育

以上の如く考へて若し吾々が幼年時代に精神的に要求されるものを満足させることがなかつたら、吾々は吾々の生涯中最も幸福なまた最も祝福されるべき時代に、希望に満ちた吾々の心が懐くものを得られないことになる。吾々が特に幼児の教育に意を用いなければならぬわけもここに在る。前にも述べたように如何に幼児でも自己の精神的自我若しくは自己の本質を十分予感している。彼等は幼児ながらに自己を一個の精神的全体と感ずることが出来る。彼等の心の裡には物を一個の全体として、而もその統一並びにその多様において受け容れる能力が目覺めている。彼の心の裡にはまた一個の全体を外部に表現し、自己の存在をばその本質の統一と多様との二方面において外界に表現する能力も芽生えて

いる。このように吾々は幼児も亦既に最高の仕事をなすものであるということ、人間の本分乃至天職を充たすに足るものであるということ、換言すれば人間の本性乃至神的本性を自己のうちに実現するに足るものであるということ認めなければならぬ。だからこの能力を熟練させ、向上させ、また自覚させて、思慮あるものにしなければならぬ。斯く考えてフレーベルにとつては教育の仕事とは要するに「自覚に進み、思惟し、認識する本質としての斯かる幼児を、意識的にまた自己決定的に内的理性即ち神を完全に実現するように勵まし、取扱ひ且つ斯かる境地に進む道と手段とを指し示すことである。」詳しく言えば幼児の裡なる神性即ち幼児の本質は教育に依つて發展され実現されなければならない。斯くすれば幼児は自由に意識的に神性に従つて生活し、神性を實現するようになる。而もまたこの教育に依つて幼児は自己自身乃至自己自身の内部を明瞭に理解し、進んで自然と融合し、神とも合一するようになる。こうした境地に幼児を導く方法としてフレーベルは何よりも先ず幼児の自己活動を重んじた。彼は教育上決して命令的な干渉的な方法は取らなかつた。この方法も彼は自然から学んだのである。彼は「人間教育」の中で言つてゐる。「若き謂わば育てられつつある人の子はまだ自覚こそしないが、自然の生産物のように飽くまでも最善

なるものを自己自身の爲に求めるといふことを人々は予想すべきである。而もその最善なものを求めるのに飽くまでも幼児は彼に適した形式を以てする。」この点について「人間教育」の中には更にこう述べてある。「人々はこの子鴨が教えられずに池に急ぎ、水中に跳び込み、雛はひとりて土を掻きつつ餌を求め、子燕は飛びつつ巧みに餌を捕えるのを見るであらう。更に吾々が若き植物や動物に空間と時間とを与えるのも、斯くして初めて彼等が美しく發展し、立派に成長することを知るからである。また彼等に休息を与え強制的な干渉的な動作を取除こうと力めるのも、斯くしなければ彼等の純真な發展と健全な成長とが妨げられることを知つてゐるからである。ところが若き人の子だけは大人にとつて欲するままに鑄型に入れ得る蠟の一片乃至粘土の一塊のようなものである。フレーベルに言わせると世の親も教師も花園や田畑や牧場や森を逍遙しながら、自然が沈黙の中に教ゆるものを聴こうとしないのである。そこででは障碍と壓迫との中に生い立つ雑草と呼ばれるものでさえ立派に内的合法性を示していないものはない。また自由の空間に、田畑に、はたまた花壇に生える植物を眺めても、如何にそれらはよく合法性を表わしているかを知ることが出来る。其等は恰も姿美しき太陽と輝かしき星とを大地の中から發展してゐるようなものである。さ

れば夙くから本性に反して形式や仕事を強いられ、その爲に虚弱な不自然な姿をして世の親達と一緒にぶらつくような子供は決して立派に成長し、円満に發展することは出来ないであらう。

このように見て来て教育は何よりも先ず子供の内的なもの即ち内的な神性に基礎を置かなくてはならない。ただすべて内的なものは外部に現われたものの中に、また外部に表わしたものを通してのみ認識される。けれども教育は単に外部に現われたものから直ちに内的なものを推断してはならない。吾々は寧ろその逆を推断する方が正しい。ところが世にはこうした真理を適用しないばかりか、却つてこれを裏切る者さえ少なくない。というのは幼児の生活において単に或る外部的の現象から直接その内的なものを推断する爲に、相反目し、相争う出来事や誤解が生じて来る。幼児や少年に対する絶えざる幾多の失敗や親子相互の間の誤解、その他幾多の無用の不平や不当の叱責、幼児に対する愚かな要求等は何れも原因はここにある。だから世の両親乃至教育者はこの真理の適用を如何なる微細の点までも熱慮するように力めなければならぬ。斯くして初めて親子の間の若しくは生徒と教師との間の信頼乃至融合が得られる。實際外観上善く見える子供も

その実自発的にまた愛情と尊敬と自発性とを以て積極的に善いことを行おうとはしないで、却つて表面上無作法な傲慢な執拗な、だから善くは見えないような幼年や少年の方が、屢々善いことに対して自発的な活潑な熱心なそして力強い努力をするものである。また外面上心の傲慢な子供がその実如何なる外部にも心を奪われない一貫せる確かな思想を懐いている。斯く考えて教育は飽くまでも幼児の生命の本質を洞察して、そこに基礎を置かなくてはならない。

以上私は主としてフレイベルの著作から彼の幼児教育論の基礎とも見るべき原理を抜き出して概観した。このような基礎的原理に基づく幼児教育の實際をフレイベルは如何に考えたであらうか。私は機会を得てこの問題を論じて見たい。

(一九五一年四月十五日)

『アメリカにおけるフレイベル運動』

頤榮短期大學講師

水野浩志

目次

- 一 序 説
- 二 フレイベル運動の一般的特徴
- 三 実際教育に及ぼせる影響
- 四 アメリカにおける幼稚園の発達
- 五 フレイベルの幼稚園原理に対する批判
- 六 むすび

一、序 説

フレイベルの百年祭を迎うるに当り、此処にフレイベル特集号を出し、もつてフレイベルの偉業をしのおと云う事は、ただにフレイベルの功績をたたえるだけでは無く、現今の複雑なる教育問題解決の鍵を見出し、眞の教育の在り方を反省

するに最もよき機会であると思う。万物は常に變轉進化する一瞬たりといえども停滞する事を許さないのであつて、ひとり教育の道においてのみ停滞の許さるべきはずは無い。しかし、又反面歴史はくりかえされている。フレイベルの偉大なる教育思想も、百年前と現今において、いささかも變る事なく妥当すると云う事はあり得ない。殊に現今の如く、心理学、生物学、科学の進展した時代において、百年前のフレイベルの教育思想をそのまま現今の教育に当てはめようとするが如きは、フレイベルの眞意を解せざる者と云うほかは無いであろう。彼はその当時における科学的、哲学的、心理学的基礎に立つて、彼の教育論を展開したのである。更に彼はもつ

と広範なる心理の發達を歓迎し、それ等の心理学的結果を新しい立場から教育的に価値あらしめたであろうと、想像されるのである。然しながらフレーベルの思想を流れる根本的な原理と云うものは、現今においても、いさかも變る事なき教育原理である事を我々は認めざるを得ないし、彼が眞の教育愛をもつて、深き洞察力と兒童の觀察から組織づけた彼の教育論の中に脈々として流れる原理こそは、むしろ、余りにも科学が分化し、専門化した爲に、かえつて生命を失いがちな現代の教育の行き方に対し、大きな警鐘を鳴らすものであると云う事が出来よう。

人はフレーベルと云えばすぐ幼稚園の設立者、遊戯、恩物の創案者位にしか見ていない。或いは又、フレーベルが如何に現今の新教育の源泉をなしているかを余り理解していない。現今の我が国における新教育運動は歴史的必然とは云え、ほとんどアメリカにおける新教育運動に模倣せしめられているのであるが、そのアメリカにおける新教育運動の起源をなしているものは実に Parker School と Deney School にとであり、アメリカ新教育を全体的に急激に發展せしめた導火線となつたのである。しかも之等は共に、フレーベルの自己活動を中心とする教育理念を高調する改革運動であつた。しかして此の運動から派生して Child Center School や Project Method 或は Wirretka Plan, Dalton Plan,

Work book Plan 等を生じたのであり、それが更に修正されて Kilpatrick 等を中心とした Community School 運動となつて来たのである。かく觀じれば、アメリカにおける新教育運動の根基には、世人否教育者からさえ忘れられてゐるフレーベルの教育理念があまねく滲透してゐる事を見逃す訳には行かないのである。

かくの如く、アメリカ新教育の根幹をなしたと云われるフレーベル運動とはしからば如何なる内容を持ち、實際教育に如何に影響し、具現されているか、そして又、アメリカにおいてフレーベルの教育思想に対して如何なる批判を下しているかに就いて以下に論述しよう。

二、フレーベル運動の一般的特点

現代アメリカ教育思想を構成した三つの大きな流れとして、ペスタロッチの運動と、フレーベル的運動と、ヘルバルト的運動の三つをあげる事が出来るのであるが、之等について一々詳しく説明する事は紙面の都合上之を割愛し、只最も偉大なる教育家ペスタロッチにより具現された教育実践の中から二つの異つた立場をもつて組織化され、体系づけられたのがフレーベルと、ヘルバルトの教育理論であつたと云う事を指摘し、之等の教育思想の織り成す綾と、アメリカの実証

主義、開拓精神並びに現代心理学と生物学の基盤等より、アメリカの現代教育學説が生れて来たと見る事が出来よう。そこでアメリカにおけるフレイベル運動なるものの性格を D. Monroe に従つてヘルバルト運動との比較の下にその特色を概観して見る事にする。

ヘルバルト運動と云うものは、元来主として教育哲学の運動であつたのであり、その教育哲学の原理から種々なる形において適當なる教育實際が演繹され、その時代と場所と解釈者により變化されて来たところのものであつたのである。これとは反対に、フレイベル運動と云うものは、幼稚園と云う特殊な学校陶冶に關聯した教育實際の運動であつたのであり、その幼稚園教育から漸次、学校教育のすべての段階に適用し得る原理を横たえているものとしての認識が、広く教育一般の中に生じて来たのである。しかしてヘルバルト運動の特色とする處は、教授技術を完成する事、並びに教授課程を最も重視する事であり、フレイベル運動の特色は子供それ自身に重きをおき、教授の出発点、並びに手段として、子供の興味、経験、自己活動を重視するものなのであり、しかもその際、教室の雰囲気や風紀、精神の向上を目指している、と云う事である。前者は教師の機能を最上視し、後者は兒童の自己活動を重視している。ヘルバルトにおいては、道德的品性を陶冶する手段として教授を強調したのに対し、フレイベ

ルは兒童の刺戟され、指導された活動力を強調したのである。ペスタロッチ、ヘルバルト、フレイベルこの三者は何れも道德的品性の陶冶と云う事を教育の目的としていたのであるが、ペスタロッチはむしろ、形式的な手段によつて、道德的品性の陶冶を爲そうとした。即ち道德的な諸徳目の中において、直接的な訓練を通して、又、「頭、手、心臓」と云う三機能の同時的訓練を通して別々な方法によつて、その目的を果そうとしたのである。ヘルバルトは同じ目的を教授によつて果そうとした。即ち、彼に依れば教授によつて教えられた理念は願望を刺戟し、願望は行爲を刺戟する。そして、表象間の相互交流作用から形作られた理念によつて導かれた行爲と云うものが道德的品性を生み出すものであると考へたのである。フレイベルにとつては教育と云うものは、兒童の自発的な活動から出發し、その自発的活動から理念に迄導かれるのであり、絶えず意欲的興味を形成する如きものであつたのである。故にそれは、只知的な訓練と云う如きものより、もつと遙かに感情的、意欲的なものであつた。

この兩者はいずれも、ペスタロッチから出發しているのであるが、ヘルバルトはペスタロッチの見解中「教育は外界との経験から理念を抜き出す事であらねばならぬ。」と云う Sense Perception (感覺認識) の訓練と云う見解を更に進め、「即時的直接的な外界からの印象と云うものこそあらゆる

る知識の絶対的基礎である。しかしして、心の内容も又全く教師の手によつて形作られるものである。」と云う事を信じ *apperception* (統覚) の訓練、並びに経験の結果を完全な高き品性に迄同社会化せようとする訓練に迄、論を進めたのであり、フレーベルにおいて、同じくペスタロッチの見解中、「教育は人間内部からの自然發展であるべきである。」と云う見解から出發して、未だ感覺的に組織づけられていない初期の段階にある児童の、自然の生得的性格は精神的諸活動に對する児童自身の感情的、意欲的な面を通して、最も多く訓練され得るのである。」との更に根本的な原理にまで掘り下げたのであり、教育は児童の生得的な萌芽を児童自身の自己活動により、發展させて行く事であり、教師は児童の自己發展への努力に對して刺戟したり、援助したりする事が出来るのみである、と答えた。フレーベルはヘルバルトの知的性格と云う如きものではなく、人間精神の意欲的性格と云うものこそ教育の最も基本的、根本的要因であると、考えたのである。

かくの如く、ヘルバルトの教育理論と、フレーベルのそれとの根本的相違は明白なのであるが、かかるフレーベルの理論を實際面においては、フレーベルは只教育の最初の段階である幼稚園のみ適用したのである。しかし乍ら彼のより哲學的な著作の中に述べられている教育の原理というものは、

あらゆる教育の段階にとつて最も基本的な原理であつたのであり、「かかる教育原理を幼稚園以上のより高い教育段階にも適用せんとする、現在並びに將來の試みは結局眞のフレーベル運動に外ならぬものである。」(Text-Book in the History of Education 1640) と、モンローはフレーベル運動の意義を高調している。又『現在における教育思想並に教育實際における最も甚大なる變革の或るものはフレーベルによつて述べられた之等の諸要求に必ずしも応せんとするものではないにしてもフレーベルの原理に一致しているのである。』(同前六四〇頁)と彼は云つてるのである。今現代の教育に一大變革をもたらした処のデュロイの實驗学校の性格の一端を彼の著『学校と社会』School and Society の中にうかがえば、『当小學校はその全課程—四歳から十三歳迄の児童が在學しているが—を通じて、フレーベルが恐らく、始めて意識的に提唱したあの一聯の原理を實行しようとする努力している事を暗示するものである。』(一一一頁)と主張している。これなどは明らかにフレーベルの教育原理を幼稚園以上の教育段階にも適用せんとしたフレーベル運動に外ならなかつた事を知るのである。

モンローは、フレーベルの理念の最もよく表われているものとしてフレーベルの著『Education by Development』(Jarvis 訳)の一節を引用してゐる。即ち、

「生徒並びに学生として、且つ又将来の実践人として、即ち独立せる職業人となる処の子供に、眞實にして、永続的、祝福的な有益且つ形成的な効果をあげんとするには、只単にそれが（教育が）現実に現われる生活に基づかなければならないのみならず、又生活と密接に結合せねばならない許りで無く、人生の要求、環境、並びにその時代の要求と、それ等が提供する処のものとの調和の中にそれを形成せねばならないのである。それは特に児童の内的生命の自覚を促す様な効果を持たねばならないし、かつ、児童の内的生命から自発的に芽生えさせなくてはならない。これこそ人間の發展的教育的訓練の性格であり、それは（人生構造に於ける必然法則、並びに自然の法則、宇宙の法則、に基づいた処の）時代の欠くべからざるものと、私のみならず処のものに従い、それを実行するものであり、又私が人生の要求として認める処のものを支持せんとするものなのである。私はかかる教育の一般的、広範な適用、並びにその実施、及び完成こそは、あらゆる人生の諸段階においても、又あらゆる環境の下においても、あらゆる教育の爲さねばならぬ仕事である程、人類並びに諸国民にとつて、非常に重要なものと信ずるのである。」

この引用において、モンローはこの中に現代の教授内容を最も著しく変革した二つの局面があるとして、次の二点を強調している。「先ず第一はカリキュラムに関係して居り、教授

内容（教材）と云うものは、それが子供の心や性格の發展を生み出すのに真に欠くべからざるものであるとすれば、それは今現にある生活そのものから、そして、子供をひきつけ子供自身の経験の中からやつて来る生活そのものから選択されねばならないと云う事を断定している。第二の事は補足的な確信で、教育と云うものが若し個人並びに社会の要求せる結果を生み出すべきであるとするならば学校教育の努力は、教育課程を最上のものたらしめる児童自身の諸活動を通して、現在ある処の生活に直接關係せしめねばならぬと云う事である。」と。かくの如く、フレーベル運動は児童の本性に立脚して、教育の全問題を企劃し、児童の意欲的性格と云う基本的な性質を考慮に入れ、児童の自己活動を通して發展させると云うこの原則から教育の他の問題をも解決せんとする運動なのである。しかしながらフレーベルの現代学校教育に及ぼした影響と云うものは余り顧りみられず、只幼稚園創設者としてのみ一般に知れ渡り、ヘルバルトが現代学校教育に及ぼした影響の跡をたどる事は容易なるも、フレーベルにおいては、極めて不明瞭にされている事は遺憾な事である、しかしながらフレーベルの之等の理念があらゆる現代教育思想に滲透していると云う事実は上の引用から、又後に述べる「D. P. Wey」による、フレーベルの一聯の教育原理として、とり上げてゐるものからも明白になるであろう。「我々は学校の教

育において、教授過程の技術よりも、むしろ児童の諸活動の上に重点が置かれる時、そして又、単に知識の伝達とか、能力の訓練とかよりは、むしろ子供の性格や、人格の發展が考えられる時には、其処にはフレイベル運動の影響が認められるべきであると云う事が出来る。」（同前六四二頁）と、P. Monroe は云う。私は今一つ「しかもその際児童の個性を社会的關係の中において發展させんとする時。」と云う事を附加せねばならないと思う。以上一応フレイベル運動の一般的特徴と云うものを概観して見たのであるが、次にフレイベル運動の實際教育に及ぼしている影響について略記して見よう。

三、實際教育に及ぼせる影響

学校教育の實際について、フレイベルは Education by Development において次の様に云つてゐる。「従来の教育と教授、訓練と学校は、一般に子供の生活の外から、若しくは子供にとつて全く魅力もなく、覚醒的な力も無く、發展の力もない様な遠い将来から引き出された理念から、その学校の要求や訓練のやり方を探し求めている。然るに真に子供が爲すべき、学ばべき事は、自己の活動や要求に内面的に結合された意志や、行爲の力から生み出されねばならず、それは、

自己自身に結合された全生活の直接的即自的努力の手段によつてなされねばならない。確かにこの事は殆んどあらゆる我々の教授課程において示されるのであり、特に大多数の人々に適用されるものである。……」と、かくの如きフレイベルの理念こそ、最も大きな影響をアメリカの学校教育に与えている。フレイベルにとつては、学校と云うものはそこで子供が人生の重要事項すなわち、真理、自由、人格、責任、創造、因果律等を学び、しかもそれ等を只教わると云うのではなくて、それ等を生活しぬくと云う事によつて、学ばべき場所であつたのである。又、彼の統一の基本的理念によれば、学校は各々の子供が彼自身の個性を發見し、その個性を引き出し、そして、率先力、実践力を發展させるべき一つの施設であるべきであつた。しかもこの事を同じ目的をもつて努力している他の子供との協同生活を通して実行せんとしたのであり、その仕事においては皆の者に興味があり、すべての者に責任があり、すべての者に報酬が享受される。な、そう云う協同作業を通して個性を發展させようとしたのである。それ故に相互的援助と云うものがこの学校における絶えざる動機であつた。しかして学校は世界と同様に一つの統一体を爲すべきであり、その中において發展して行く個性の各々が人生への参与を通してその成熟を見出すべきであつたのである。Hughes はその著 Froebels Educational law の中ペン

レベルの学校の有様について、次の様に云つてゐる。「彼の幼稚園又は学校は、一つの小さな世界であり、其処ではすべての者によつて責任が分け与えられ、個人の権利は皆尊敬され、兄弟的愛情はみなぎり、自発的な相互協力が実施されていた。」と、(一六頁)かくの如く統一の相関としての協同、並びに統一の中の多様、それはすなわち人生の法則であり、實在の法則であるが、学校は社会の縮図であり、教育は実に人生に対する準備としてではなくて、人生の縮図としての一位相であると云う考えが此処から生れて来るのである。教授と云う事は子供の自発的な諸活動、並びに生来の興味から発して、何等かの創造的仕事を爲さしめるとか、或いは、望まれたる知的目的、知的表現を爲さしめると云う一聯した過程の中間語義となるのである。生来的な傾向の上に、望まれたる教育目的、として是認される如き一つの習慣、又は習性とか、或いは活動様式や思考様式が接木されるのである。かくの如く教育は自然を無視するものでもなく、又自然を全く放任して置くものでもなく、自然を援助せんとつとめるのである。自然が援助なしに到達するよりも、より高い目的に迄自然を導き、或いは少くとも之等の諸目的をより迅速な直接的な手段によつて、手に入れる様につとめるものなのである。これこそは現代学校教育の眼目となるのであり、さればこそデューイは、フレレベルの理念実現の爲の実験学校をシカゴ

の大学に設けたのである。今此処にデューイが実現せんとしたフレレベルの一聯の原理と云うものを彼の「学校と社会」の中から取上げて見よう。

一、学校の第一の仕事は、協同的、相互扶助的な生活の中において児童を訓練し、彼等の中に相互依存の意識を養ひ育て彼等を実際に助けて、この精神を明白な行爲として実行させる様に調整せしめることである。

二、すべての教育活動の最も根本的な基礎は児童の諸々の本能的、衝動的な態度および活動に存するのであつて、他人の觀念を借りるにせよ、或いは本人の感覺に訴ふるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し、適用することに存するのではないと云うこと。したがつて又、児童の数がぎりなき自発的活動、すなわち遊戯、競技、物真似さては幼児の一眼無意味な動作——在来はつまらぬもの、無用なものとして無視されるか、或いは積極的に邪悪的なものとして難ぜられさえした現象——は、これを教育的に用いることが出来るのであり、否、實に之等の事は教育的方法の根本的礎石なのである。

三、これ等の個人的な傾向並びに活動は、さきに述べた協同的な生活の仕方を爲している中に組織され、方向づけられるものであるが、それはこれ等の傾向や活動を利用して、児童が最後にはその中に入るところのより大なる、より成熟した社会の典型的な行爲及び仕事を見童の程度に応じて再現す

ることを意味するのである。そしてまた、児童は生産と、創造的な仕事を通じて価値ある知識を獲得し、確保するものである。

以上がフレーベルの教育原理を平易に解釈した根本的原理であるとし、「以上の説明がフレーベルの教育哲学を正確に代表している限りにおいては当小学校はフレーベルの教育思想の主唱者とみなさるべきである。」(同前一二頁)と云つていたのであり、この実験学校においては如上の諸活動を出来るだけ忠実に誠実に四歳より十二歳迄の子供達に適用したのである。その全過程と云うものは殆んどフレーベルの幼稚園的態度をもつて貫かれていたと云う事が出来るのである。

遊戯……フレーベルの実際教育に及ぼした最も著しい影響の一つは、幼児教育における遊戯の価値を明らかにした点である。フレーベルにとつては遊戯は只心身の発達をはかると云うが如きものではなく、又決して外部からの押しつけられる如き行爲でも無く、遊戯こそは子供の最も特徴ある自発的活動の発現であり、幼 教育過程の基礎となるものであつたのである。子供の生采的な諸興味から、直接的に影響されて最も自然な幹を供給し、その幹の上に教育者によつて是認される如き行爲や感情や思考の習慣が接木されるのである。遊戯を通して始めて子供は自己を世界に明示するのである。それ故に教師が子供に、彼が参与せんと努める人生の事を説明

出来るのは遊戯を通じてだけなのである。遊戯を通して教師は最もよく子供を実際の、社会的關係の世の中に導入する事が出来る。子供に独立の精神並びに相互扶助の精神を与え、率先的動機を供給し、そして社会的全体の一員を構成する個人として子供を發展させる事が出来るのである。フレーベルは遊戯の教育的価値の単なる説明に止まる事なく、幼稚園の実際教育過程において、その理念を実現したのである。しかして、このフレーベルの遊戯の教育的価値と云うものは、ただに幼稚園教育のみに留まらず、学校教育全般に亘つて適用され得るものであつた。かかるフレーベルの理念は漸次アメリカの学校教育に取り入れられるに至つて来たのである。

構成作業……フレーベルはあらゆる手工的生産訓練に対して、又構成的な仕事に対して、明確なる教育的根拠に立つて、構成的生産的訓練が現代教育において占めるべき地位を与えたものであると云う事が出来る。勿論生産的訓練を強調した人に、ルソーやペスタロッチをあげる事は出来るが、ルソーにとつては、教育の一面面としてしかみとめられなかつた。又ペスタロッチは知識の基礎としての感覚訓練として生産活動を重視したのであり、フェレンベルグは社会的、経済的見地より、より以上には前進しなかつた。しかるにフレーベルにおいては、その生産的訓練にペスタロッチの受動的な目的より更に進んで、創造的な目的を与えたのであり、そ

の創造的生産を通して、子供の内的萌芽を發展させんとしたのであり、この生産的訓練を通して、学校教育はその最高目的に達するものであるとしたのである。しかしながら、フレイベルは、この構成作業の価値に關して、現代科学思想では少しく不可解な、神秘的な価値を之に附加してゐるのであるが、之は彼の神秘的象徴主義から結果するものとしてアメリカにおいて之を余り重視せず、只構成的作業の価値を次の様な原理として、大いにとめてゐるのである。すなわち、「教育と云うものは、内的自己を外的に顕現し、表現する力を發展させる事に、外ならぬのであると云う原理としてである。手による創作と云うものが、内的自己の最も高い表現である」と云うのでは無く、この子供の内的衝動より始められた物的表現の力の發展と云う事が、習性とか、性格に晶化されて知的、道徳的、精神的行爲を表現する、より高い力の基礎となると云う事に外ならないものである。」(モンロー、前掲書六六二頁)と。かかる見地から学校における構成的な仕事は只單なる感覚の訓練とか、技術の發達とか、体力の練磨とか、機械的道程の参与とか、職業人としての技術の獲得とか云うものよりも、より深い目的を持つものとして、即ち、それは内的理念の最も具体的な表現形式として、又諸々の習慣形成、性格形成の最も確実なる過程として、現代教育において大いにその価値を認められてゐるのである。以上の如く

フレイベルの教育原理における現代的要素と云うものは顯著にして、その長所と云うものは現代学校の教育過程における最も重要な法則として、次第に認知され、あらゆる有効なる教授方法として高く評価されるに至つたのである。フレイベル自身は幼稚園以上の学校教育過程に彼の原理を組織しはしなかつたが、時間の余裕さえあれば、上級学校の教育過程にも之を入れようとした事は当然考えられる。しかしながら、このフレイベルの理想は漸次理解され、教育のすべての場において、獨創的に断行、協力、自己活動の方法により、個人を發見し、且つ發展する理念を実現する様になつて来た。その著しき例は遊戯や構成的作業をこの目的に従つて益々使用する様になつて来たのである。例えば“busy”(多忙仕事)“whittling”(削り作業)“clay-modeling”(粘土細工)並びに“loyd”(手工教授法)と呼ばれる教育法は十九世紀中、アメリカの諸学年に採用され、更に Manual training (手工訓練)と云う、より進んだ様式で推奨された。之は現代のハイスクール更に進んでは専門学校の教育においても特殊の様式の学課過程となつた。何れも大部分はフレイベル主義の影響と云うべきものである。当時ヨーロッパにおいても手工訓練が盛んに用いられる様になつたが、それ等はむしろ工業的生産的効果の爲めに行われたものであつた。教育的効果の爲めにこの構成的作業を用いる様になつた始めは、一八

七六年、フィラデルフィア大博覧会において行われたものであり、之が全米合衆国に暗示と反響とを与えたのである。之に刺戟されて、近代的教育理念と、教育實際の種々なる典型特に実験を伴う処の研究が合衆国において盛んとなつたのであるが、之等は何れもフレール運動の大きな要素を啓示したものである。その中には Colone Parker の事業並びに John Dewey の功績と云うものが含まれている。パーカーはヘルバルト式教育方法を採用し、特に之に力を入れたにも拘わらず、彼は又フレールの高調せる自動的表現、教育の社会的見解、並びに形式ばらぬ学校教授を小学校教育に採用せしめた点、著しき貢献であつた。又、デュロップの構成的作業並びに、生産活動等は、何れもシカゴの実験学校において実験されたものであるが、それ等は直接フレールに模倣したものであるが、まさしくフレール式幼稚園の形を変えた實際教育に過ぎないと云うべきである。以上アメリカにおけるフレール運動の實際教育に及ぼしている学校教育の理念、並びに実情に就き、その概略を述べたのであるが、次にフレールの教育理念の具体的な表われであつた幼稚園の、アメリカにおける發展を簡単に概観して見よう。

四、アメリカにおける幼稚園の發達

フレールはその教育理想を實際においては、彼の幼稚園教育において之を具現したのであるが、彼の幼稚園教育の理念に就いて詳しく述べる事は他に譲るとして、此処には、フレールの創案した如き幼稚園がヨーロッパにおいてよりもむしろ、アメリカにおいて最もよく發達したと云う事について、その理由、並びにその發達過程を略述しよう。先づその理由として挙げられる事は、幼稚園における教育法と云うものは、当時において全く新しいやり方であり、之等の創造的活動を重んじ、自然の觀察の中に於て、神的なものを洞察し宇宙の統一法則を見出さんとする方法、或は他からの押しつけの方法を一切排除し、兒童の自由なびのびした肉的生命の發展をはかる等、当時の、ヨーロッパの伝統を固守し、或いは専制主義的体制の時においては、何れもその完全なる發展を見る事は不可能であつたと思われる。しかるにアメリカに於ては、未だ固定した如何なる觀念もなく、すべて未開の荒野を自らの手によつて切り開かんとの開拓者精神や獨立精神に燃え、實際に自らの經驗によつて何事をも立証せんとする実証的精神やピュリタニズムによる清新な氣が國土に満ち満ちていたのである。さればこそフレールは当時自己の幼稚園禁止令にあり、悲歎にくれつつ、『アメリカ國民の精神こそは自分の創造的方法と、完全に一致している処の世界唯一のものであり、幼稚園の正しい設立もアメリカ國民性に何

等差支えを及ぼさないであろう。』と云い、アメリカに渡つて自己の幼稚園を設立する事を懇願したのである。又、バロネス・マールレンホルツ・ビュロー夫人が晩年ビーボデイ嬢に書き送つた手紙の中で、彼女が『硬化してしまつた如きヨーロッパの保守主義の国の中に、この生き生きとした芽生えを植えつける事が非常に困難であるという事、そしてこの生き生きとした萌芽は、使い古されぬ、耕やされたばかりの新鮮な土壌を要求し、アメリカの原始的な活動力を持つた、アメリカ国民性のあらゆる生き生きとした影響力が必要であるという事』を悲し気に書き送つてゐるのを見ても、何故アメリカにおいて、フレイベル式の幼稚園が発達したかの理由を洞察するにたたくないと思われるのである。しからばかくの如く、フレイベルにより望まれたアメリカにおいては、その幼稚園は如何なる発展をたどつて来たのであろうか。

アメリカにおける幼稚園の最初の試みは十九世紀中頃に始められたのである。一八四八年の革命の影響で国内的にも家庭的にも不安定な状態であつたヨーロッパでは、アメリカに移住する者が多かつた。その中で教養ある独逸人達は、彼等の子供達の爲に通常、幼稚園を含んだ私立学校 German American Kindergarten を建設した。一八六〇年に Elizabeth P. Peabody 並びに若干の人々は、Mrs Carl Schury が行つた。フレイベル運動の話しに興味を持ち、詳細なるフ

レイベル教育体系の知識もなしに、ボストンに始めてアメリカ式幼稚園を開設した。その学校は直接的な成功をおさめ、子供達が非常に喜んでにも拘わらずビーボデイ嬢は自分がフレイベルの眞の原理、並びに精神を得る事に成功してなかつた事を感じ、一八六七年に、彼女は当時ハンブルグに数年間滞在していたフレイベルの未亡人の所へ勉強しに行つたのである。彼女の帰国した翌年ビーボデイ嬢は、彼女の仕事における過程を是正し、そしてフレイベル主義を説明し広める爲に定期刊行雑誌を出版した。彼女はその後、余生をよき親として、又博愛主義者として学校の委員として過したのであるが、彼女のアメリカにおける幼稚園に対して爲した功績と云ふものは、殆んどヨーロッパにおける、バロネス・マールレンホルツ・ビュロー夫人の幼稚園事業にも匹敵するものであつた。一八六八年にビーボデイ嬢によつて合衆国における最初の幼稚園保母養成所がボストンに建設せられ、同様な学校が Maria Bölte (後 Mrs Maria Kraus-Bölte) の監督の下に一八七二年、ニューヨークに開設された。ヴェルテ嬢は、フレイベル夫人の下で勉強した人で、ニューヨークに幼稚園を開設する様 Germerey Park の Miss Haines に招聘されて来たのである。彼女の教を子達、並びに独逸幼稚園の人達によつて、アメリカの幼稚園運動は急速に進展した又ヴェルテ夫人の学校から Susan E. Blow が分岐して、セ

ントルイスに偉大なる事業を始め出した。そこでは無料の保
姆養成学校を開設したのである。その二年後にはマサチュー
セツツのフローレンス生れの S. H. Hill は、彼の近村に無
料の幼稚園を創設し、又四年後には Quincy A. Shaw 夫人
は、ボストン近くの種々なる場所に幼稚園を設立し始め、遂
に彼女は少くとも三十以上の幼稚園施設を作つたのである。
多くの他の博愛主義者達も非常に幼稚園に興味を持ち始め、
百以上もの私立団体が間もなく皆幼稚園を経営する様になり
一八七六年には "Froebel Union" (フレイベル協会) によ
つて、カリフォルニアへ招聘された Emma Marw del の
働きにより、すばらしい保姆学校がロサンゼルス、オークラ
ンド、並びにバークレイに建設された。私立幼稚園は同じ様
に、各地に急速に開設され、一八七八年には Golden Gate
Association (金門協会) が、サンフランシスコに組織され、
それはその全盛期には五十一の私立学校施設と、卓越した保
姆養成学校を持つていたのである。一八七〇年より一八九〇
年の間に、ミルウェーキー、シンシナティ、デトロイト、ピ
ッツバーグ、バルティモア、フィラデルフィア、クリーブラ
ンド、ワシントン、シカゴ、ルイスヴィル、並にその他の地
方の中心地には、教会或は博愛主義者の媒介によつて、署名
が爲され、その幼稚園事業は到る所に急速に發展した。十九
世紀の終りまでには約五百以上の同様な私立団体があつたの

である。

しかしながら博愛主義的私立施設は結局、限られたもので
あり、それは合衆国における真の國民的運動たる学校組織に
採用される迄には至らなかつたのである。所が、一八七〇年
頃、ボストンでは、その公立学校に二、三の幼稚園を附属せ
しめたのであるが、実験の数年後には、費用の点で、それ等
は廢止されて了つた。市の會議の下に依られた最初の永続的
な学校は、一八七三年、セント・ルイスに、ブロー夫人やウ
イリアム・ハリス博士の努力、並びに市の視学官の努力によ
つて設立されたものであつた。始めそこでは十二の幼稚園が
組織されたのであるが、その他は、ブロー夫人の保姆養成学
校で、充分資格ある幼稚園管理者が準備されるをまつて、急
速に開設されたのである。その後十年以内に、セント・ルイス
には、五十より以上の公立幼稚園、並びに約八千人以上の生
徒が居たのである。サンフランシスコでは一八八〇年に、公
立学校に幼稚園を公然と附属する事になり、爾後二十年間に
ニューヨーク・ボストン、フィラデルフィア、パツファロー
ピッツバーグ、ロツチェスター、プロビデンス、ミルウェ
ーキー、ミネアポリス等の市に、そして又大概の他の進歩的
な諸都市、小自治都市にさえも、幼稚園が彼等の学校組織の
欠くべからざる一部分であるとされたのである。一九〇〇年
迄には、学校組織に、この幼稚園学級を包含した所の都市の數

は、約二百もあつた。それは總計約五百の公立幼稚園と、約その二倍近くの先生達と、約十万人より以上の生徒が居た事を示している。約二十もの都市は、幼稚園の仕事を管理するべき、特殊な視学官を配置したのであり、優秀なる保姆養成学校は約五十もの公立、並びに準公立の師範学校によつて維持されており幼稚園事業の課題に捧げられた沢山の、詳細なる論文、便覧、並に雜誌が發行され、合衆国の各州に広く流布されてゐるのである。

更に最近の資料“Public School Organization and Administration by Fred Engelhardt”の頁(一四四頁)小学校の随意の一年制度としての幼稚園は、今や前初等学級(Pre-Primary Grade)として充分認められる様になり、地方の公立学校制度の全き組織の一部として建設される様になつた。一九一〇年以降、私立幼稚園は衰え、幼稚園を持つた公立学校が多く生じ、一九二四年調査された八一七の小都市(人口二千五百人より一万人)の中で、その三十パーセントが私立幼稚園制度を持つており、三万人以上の人口を持つて都市の半分以上は幼稚園組織を、公立学校組織の中に持つていた。かくして、今迄小学校とは別個に存在していた幼稚園の理論は、何年も曖昧に考えられて来たが、現在では次第に小学校の最初の学級として密接に關聯する様になり、幼稚園の理論は、Child Study (兒童研究)の名前で大いに發展し

た。この制度に新しい生命を吹きこんだ人は、スタンレイ・ホール、フランス・パーカー、並にジョン・デューイ等であり、この運動の指導者であつた。かくて幼稚園保育の精神は、次第に小学校低学年に適用され、一層現代式な研究が之等若き子供達の必要に、よりよく適合される様、探究され今や小学校の四年間は、一般に広い移動可能な教室や道具、必要に応じて使われる如き遊戯場が与えられる様になつたと報じてゐる。

かくの如く、アメリカに於ける幼稚園の發達と云うものは、非常に著しく、フレイベルの根本精神を、如実に学校教育に適用せんと努力してゐるのである。先に述べた如き、デューイの実験学校等も、その一例であるが、單に、フレイベルの理念を、幼稚園の教育理念として留めるのではなく、それ以上の学校教育の制度の中に、この精神を、實際に生かしてゐるのであり、合衆国の各州において、幼稚園と云うものは、各学校の最低学級として正規の学校組織に編入され、或はその独自の幼稚園の名称さえ、解消されるかも知れない、と云う現状にある。しかし幼稚園の名は減んでも、その幼稚園の教育精神は減びずに、むしろ却つてフレイベルをして我が意を得たりと云わしむるかも知れないのである。現今、我國の幼稚園教育は相当活氣を呈し始めたが、未だ未だ幼稚園教育が小学校教育より分離し、孤立状態にあり、兩者の間に

密接なる聯関がないと云う事は非常に遺憾とする所である。アメリカにおける幼稚園教育の実情と思ひ合せ、更に一層の努力と研究、並びに團結を我が幼稚園教育者に促す次第である。

五、フレーベルの幼稚園原理に對する批判

アメリカにおけるフレーベル運動の性格、實際教育に及ぼした影響、並びにその最も具体的ならわれである幼稚園の發展過程を一通り概観して来たのであるが、最後にフレーベル運動に對する現代アメリカの批判と云うべきものを述べて見たいと思う。前記の論述において、我々は如何にフレーベルの教育理念が、偉大な影響を現代教育に与えているかが明らかとなつたのであるが、それは必ずしもフレーベルの教育理論のこととくが現代教育に妥當するものであるという訳ではないのである。殊にフレーベルの神秘的、宗教的、象徴主義的な表現は、現代心理学からは説明し得ぬ不可解な点を多く藏しているのであり、アメリカにおいても、フレーベル主義を唱える人々が全くフレーベルに盲信し、あえて現代科学に立脚して之を新に進展せしめ様としない人々を批判し、反省を促しているのである。しからばアメリカにおいては如何なる批判がフレーベルの原理に對して加えられているので

あるるか、次に現代アメリカの新進鋭の教育学者 KIPPART-HOLT 教授による『批判に試みられたフレーベルの幼稚園諸原理』（一九一六年）なる本より、現代アメリカ教育の光に照らして見た峻厳なるフレーベル批判の一端を紹介しよう。彼はその序文において、『過去二十五年の間に幼稚園の改革がしつかりした足どりで前進したと云う事は全く眞実である。しかし、幼稚園の経営者達の重要な母胎は、今尙その改革に反對している。彼等の理論が従来そのままであるならばすなわち、彼等の同類の人々に對して特殊な専門用語で述べられた事実上の神秘的教義である例のままの理論であるならば、その教義は適切なる評価を欠いて居り、彼等の幼稚園は初等学校この適切なる調整を欠くであろう。』しかして『教育の一般的研究者が幼稚園の教育理論を全教育理論と密接な關聯の下に正當に位置づけるまでは、幼稚園は一ケの獨立したものととして、他の教育的努力とは關係なきものとして、存在するのである。』『完全なる幼稚園の改革と云うものは、あらゆる人々の協力によらなければならない。』『この本の主要目的は幼稚園の理論と、實際の改革を広めるのに役立つ事なのである。』と云つて居る。彼はアメリカにおける経験を積んだ幼稚園の先生や學者、並びに小学校の先生を主体とした、フレーベル幼稚園に關する講習会を開き、現代の光に照らしつつ批判を爲し、更に原典を参照して痛烈に批判を

加え、この本を出版したのである。さればこの本に述べられたフレイベルに対する批判、並びに評価と云うものは、アメリカにおける幼稚園教育者、並びに初等教育者の一般の見解を代表しているとも見る事が出来るであらう。この本の詳細なる検討は又後日に譲る事として、今此処では彼の見解の結論的なものを紹介するに留めて置こう。彼はその中で、フレイベルの根本的誤謬として、次の諸点をあげている。

1、相反の法則 Law of opposites

この法則はフレイベルにとつては、宇宙の根本法則であり、彼の教育体系の方法上の基礎であつたのである。この事については余り論述してなかつたが、この相反の法則と云うものは、彼の教育著作の到る処に表われている。フレイベル自身『私の教育的方法の全体は、この原則のみ拠つて教育の方法が合理的なるものか否かは、この相反の法則を認識するか否かにかかつてるのである。』と云い、この法則をあらゆる処に適用している。殊に恩物における美的形式を作る時にこの相反の法則を役立たせているのである。かかる法則に対して、キルパトリックは、『其処では何等かその様な事があると云う事は疑い得ないが、その分量たるや実に僅かなものであり、』（同前四八頁）その様な法則を認める必要は無いとし、『フレイベルにとつては、この反対法則は

宇宙の根本的法則であり、彼の教育体系の根本的意識であつたが、我々はこれ等の何れの立場をも認める事は出来ない。』と、又『フレイベルが彼の教育の實際が相反の法則の上に導かれたと自ら云つてゐるのは悲しむべき事の様に思われる。』（同前五四頁）として、フレイベルの相反の法則が象徴主義に禍されたことづけの説明であると、その根本的誤謬を指摘してゐるのである。

2、発展の法則

フレイベルの自己発展の原理は、現代教育にも大いに取り入れられた非常に価値あるものであるが、しかしその中にも受け容れ難い点として、フレイベルがその発展を萌芽の中に存在した内容を充分に発展さす事とした点に誤ありとしてゐる。児童の有せる萌芽と云うものが、それ自身善にして、大人の持つべき理念を内に藏せるものであり、只それを開發するものであるならば、指導等は要らぬはずであり、又何等社会的選択等は要らぬはずなのに、フレイベルは其処に指導を認め、又、社会的選択を認めてゐる点、非常に中途半端な理論であるとしてゐる。又、『子供の内部にこの社会選択の要素があるのだと云う事を許す事は出来ない。この事を承認するのは社会的環境の価値を排斥する事になるのである。又単に、子供の内からの自己発展と云つても、純粹な従屈的教育

は単なる野性と無秩序に導くであろう。』(同前九二頁)と云つてゐる。そして、フレーベルの云う内的理念に關しては、フレーベルが『若し子供の中に横たわつてゐなかつたならば、又若し、それが子供の内に生きて居り、働いてゐなかつたならば、そして又若し、既に子供の生命を意義づけてゐなかつたならば、それは決して後年になつて、子供から出て来る事はなかつたであろう。』と云つてゐるこのフレーベルの信念はフレーベルの著作の至る處に出て来るのであるが、それ等は象徴主義と結びついて極めて認容し難い供述をなしてゐる。とし、『現代心理学は、この様な教義に対して、何と云うであらうか、フレーベルは現在、我々が本能的なものと云う一般的な考えの下に入れてゐる様なものと同一現象を、明らかに考へてゐるのである。子供の中には未だ学ばれざる傾向があると言ふ事は、論ずる余地は無い事實であるが、しかしそれが果して「内的理念」であらうか？子供が円周遊戯に興味を持つと言ふ事は「宇宙の軌道運動の内的予見から」とか、「人類一般の集合的生活の象徴であるから」するのであると云う様なフレーベルの信念を証拠づける何ものをも見出し得ないし、又全体 Whole を求めると云う子供の要求は、形而上学的全体に対する興味と何等の關聯をも持つてゐない。その様な予期とか、予感とか、内的理念とか云うものを現代心理学は輕蔑と、嘲笑をもつて、信じないのである。』

(同前六五頁—六六頁)として、徹底的にフレーベルの内的理念の根本的誤謬なる事を指摘してゐる。この事は Dewey も同様な事を云つてゐる。『フレーベルが兒童の先天的能力の深遠を認め、之に熱心な注意を拂つた事、及びこれを研究せんが爲に世人を誘導した彼の感化は多分成長の觀念を広く世界に認めさせた近代教育において個人としては最も大なる貢獻である。けれども、彼のいわゆる發展の觀念及びこれを奨励する彼の方法は、彼が發展と云う事を既に出来上つてゐる潜在力がただ外的に開發する事にほかならないと見ることによつて、痛ましくも阻害されてゐる。』(民主主義と教育六七頁)と。

3、象徴主義

これについては相當詳しくキルバトリックは図解して述べてゐるが、その結論だけを云へば、象徴的な連けいと云うものは、象徴の觀念に先立つ経験から常に生ずるのである。どんな處にあつても、象徴については経験が知覚に先立つてゐるのであり、未來は只過去の關係においてのみ暗示されるのであるとし、『フレーベルの象徴主義と云うものはそれが内的萌芽理念を仮定し、又象徴が経験に先立つて有効であると仮定する限り根拠のないものであると、結論するに難くない。』(同前七九頁)と結論してゐる。Dewey もこの象徴

主義に関する限り同様にフレーベルの根本的な誤謬であると
している。即ち、『フレーベルは具体的な経験的事実と、超
自然的な発展の理想とを連結する爲に、前者は後者の象徴で
あると見たのである。既知の事物を或勝手な先験的形式に当
てはめて象徴と見る事は、或卑近な類似物を捉えて、宇宙の
法則となし、之を珍重がる浪漫的な空想を奨励するものだ。
それはとかく象徴主義の計画の下に或適當なる技術を考え出
し、感覺的に手近な象徴の内的意義を見童に理解させようと
する大人の頭で考え、大人の技術によつて、象徴をおしつけ
んとするその結果、フレーベルの抽象的な象徴主義は彼の見
童に対する同情的洞察以上に出で、彼は教育史上未だかつて
見ざりし程の専断をもつて、外的に命令を事とする悪方法に
陥つたのである。』（民主主義と教育六八頁）と。

4、恩物系列其他

フレーベルの恩物系列に関しては、『彼が子供の自己發展
を促さんとの目的の下に、適当に選択したものであり、彼の
見童教育に対して未だかつてない最も本源的な価値ある暗示
を与えた事は之を高く評価すべきであり、教育方法に非常な
貢献をしたものであつた。』（キルパトリックのフレーベル
原理批判二四六頁）とキルパトリックはフレーベルの恩物に
対してはその努力を認めつつも、その中に流れる内的理念や

象徴主義的傾向に対しては、之を徹頭徹尾嫌い、之を現代科
学に照らして分析し、攻撃している。此処にも又その結論の
みを紹介するならば『①すべてを包含する理念の系列を子供
に与えんとするフレーベルの直接的な目的は論理学と、心理
学との混同に基く誤謬である。②この目的を象徴主義によつ
て完成せんとする、その根本的方法是虚偽にして、人を欺く
心理学に基いてゐる。③若き子供の教育に対し、特殊な資材
とか、限定せる材料を求めねばならぬと云う彼等の充分なる
根拠は未だ現われていない。④若し、その様なものが要求さ
れるならば、それを計画する論理的な手段と云うものは見童
心理学を全く破壊する事である。⑤フレーベルの提案による
恩物系列は、理論的に是認をされず、又実際において不当で
ある。⑥よりよき学課過程に対して科学的探究を妨害する如
きフレーベルの恩物系列を将来之以上に用いる事は、そうめ
いなる幼稚園保育者を悩まし、且つ、最上として知られてい
る教育を樂しまんとする子供の権利を侵害するものである。』
（同前一五〇頁—一五一頁）と。以上の如くフレーベルの恩
物系列が全く象徴的でその目的も、由来も、使用も、仮定的
効果も、皆象徴主義に支配され、完全にその上に基礎づけら
れてあり、その象徴主義が否定されれば、その恩物系列は紛
紛になりその使用は迷信より外の何物でもなくなる。と極論
しているのである。しかしながら、我々はキルパトリックの

批判に對し、これをそつくり受け入れてよいであらうか。果してフレイベルの恩物系列は象徴主義の故にことごとく放棄されるべき性格のものであらうか？かつて、Miss Peabodyは、『私は一言フレイベルの恩物等を改良したと自負しているあらゆる評判のよいものについて警告するであらう。之等の自負について、我々は余り尊重する事は出来ない。フレイベルは彼の半世紀の自分の実験によつて、幼稚園児童の最も必要とする基本的なものを探究し、恩物としたのである。七歳以下の子供達、少くとも三歳又は四歳位の子供達は、あらゆる國、あらゆる時代においても全く同様なのである。』と云つてゐる。(Kindergarten and Child Culture P16) 現代心理学の基盤の上でのみ立ち過ぎ、かえつてその眞生命を失ふ事のない様、我々は更にこの兩者を検討する必要があるであらう。それはさておき、キルパトリックは、フレイベルによつてくわだてられた特殊なる幼稚園の活動は、何等かの意味で、ことごとく象徴的であり、象徴主義との關聯が多ければ多い程、フレイベルの眼にはよりが価値あつたのである。となし、結局『我々はフレイベルの象徴主義に對してはその極微量も幼稚園の目的から取除かれねばならないと云う事、そして、彼の根源的な教育過程の実行は健全なる心理学の要求にかなう様作り変えられなければならない。』と結論している。その他二三、フレイベルの思想に於ける誤謬をキルパト

リックは指摘しているが、しかし彼も又、決して単にフレイベルを非難するのみではなかつた。むしろ、眞にフレイベルの理念を愛したればこそフレイベルの偉大なる教育理論を研究し、現代心理学の基盤の上に、之を立てなおさんとしたのみである。キルパトリックは云う『フレイベルの長所の最大なるものは子供に對する彼の熱愛と、子供に對する深い洞察であつた。』と、そして、フレイベルは、『その当時における如何なる人よりも、児童の個性を尊重した。その当時の一般的意見に反對して、墮落の法則を徹底的に排撃した。フレイベルにとつては、児童の自然の興味と云う事は、如何なる能力を養ふと云う事よりも、最も本質的なものであり、尊重すべきものであつたのである。彼の体系の中の遊戯はその實際的教育的立場において、第一のものである。又手細工、並びに構成的諸活動は常に高調され、獨創を尊んだ。之に直接關聯して自己活動の原理は現代における興味の最もよい原理に驚く程似通つてゐる。』(同前二〇二頁)と、又フレイベルの自己表現 expression に関する教育的効果の主張、或いは構成的作業の価値、更にはフレイベルの社会的關係の中にそれを通して、児童の自然的傾向、個性を伸し得る事を主張し、或いは又、自然研究における倫理的要素を高調した事形式的宗教教育を学校教育にもちこむ事を廢止し、或いは教科書中心の教育法、知識万能、記憶万能主義の排撃をした事

等「実にかくの如き幻想の象徴としての幼稚園は教育史上劃期的段階の永久的記念碑として、輝やき残るであろう。」と云い。「恐らく、あらゆるものの中で最も価値ある事は、子供達が教育的活動の下に如何に幸福にいそしみつつあるかを幼稚園を通して、その実際的実例を世界に示したことである。」とし、最後に、「かかるフレイベルの理想的幻想の組織、又かかる可能性は、象徴主義の古い殻を脱ぎ捨てて、恩物とその過程の中に加える事が出来るであろうか、又自発的にして、子供を中心としたよりよき生活のよりよきデモクラシー理念をもつて生活出来るであろうか？幼稚園は一つの普通教育過程中に、より広い生命を見出さんが爲に、従来の附屬的な非本質的な、部分を失う事に満足し得るであろうか。そして、若し必要なれば、幼稚園はその特有な名前さえも喜んで捨て得るであろうか？既に調査した処によれば、多数の人々 J. Dewey 等一は之等の問題に対して然りと答えてゐる。小学校の一隅に場所を与えられたる幼稚園は小学校の各学級に対して、最上の精神を与えるであろう。しかし、かくすることによつて、幼稚園の独立的存在は失われるが、フレイベルの幼稚園は一層多く、又一層広く永遠に存続することになるであろう。」（同前二〇二頁—二〇八頁）と結論しているのである。

以上はキルパトリック、並びにデュイイのフレイベル理念

に対する批判を略述したものであるが之等の教育と云うものは決して只合理的、科学的に解釈出来得る問題では無く、其処には非合理的、非科学的領域を持つと云う事も忘れてはならない。勿論アメリカにおける如く、現代科学的、心理学的批判と云うものは決してなおざりにすべからざる重要事であり、かかる現代の流にさおさす事なく、只単に過去の偉人の教育理論を準法すると云うが如き態度は排すべきであるが、又反面、現代科学にのみ頼つて、真に偉大なる古人の精神や生命を破棄してはならない。真の教育的効果は実に教師その人の精神にあるのである。今フレイベルの百年祭を迎うるに当り、深く古人の偉業をしのび、その偉大なる教育理論の真髓を把握した上で、現代科学、心理学の基盤に立ち、現代に生きるフレイベルの教育論を復活させ、觀念の遊戲に終る事無く、アメリカ的实践力をもつて、我が国幼稚園教育を更生することこそ、現在の我々に与えられた使命であると思う。

フレイベルの生涯

お茶の水女子大學講師

津 守

眞

幼稚園の創始者として知られているフレイベルは、
いかにして幼児教育の道に志したのか、又彼はどのよ
うな人間だったのだろうか、それを明らかにするため
に彼の生い立ち、その生涯を辿ってみようと思う。

一 幼年時代

フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フレイベルは、一七八二
年四月二十一日チューリンゲンの森のほとり、オーベルワイ
スパツハというシュワルツブルク・ルードルシュタットの一
村に生れた。ドイツは森の国と云われるが、チューリンゲン
は中でも最も代表的な森であり、オーベルワイスパツハはそ
の森林地帯の中の高原にある小さな村である。父はヨハン・

ヤーコプ・フレイベルと云い、旧ルッター派の牧師で、その
村の主席僧侶だつた。兄が四人と姉が一人あり、フレイベル
はその第六子として生れた。母はフレイベルの生後間もなく
病氣になり、彼の生命を九カ月育んで亡くなつた。彼の生
涯の波瀾は既にこの時から訪れたのである。母の死はその後
長く彼の心の上にいろいろな形で影響を与えた。父は近隣の
多くの人々の魂の世話を一手に引き受けていたので、極めて
多忙であり、自ら育児や教育に携わる暇がなかつたので、母
の死後フレイベルの世話は召使に託されたのであるが、召使
は父の多忙にかこつけて十分その責務を果さず、彼は年上の
兄弟達によつて育てられた。そういうわけで、彼には「母が
なかつたと同様に、正しい意味では父もなかつた」のである。

一七八五年、四歳に入つた時に、父は再婚し、二度目の母が来た。最も愛情を求める幼児前期に、すべての愛情を注いでくれる母なくして育てられたフレーベルにとつて、新しい母親の出現は一大事件であつた。彼は真心をこめて子供の愛を母に献げた。そしてその感情は酬いられ、彼の幼児期における最も幸福な、楽しい数カ月を過ごすことが出来た。しかしこの幸福は長くは続かなかつた。翌年母には新しい男児が授けられた。それと共にそれまではともかくもフレーベルに向けられていた愛は全く新しい子供に向けられ、フレーベルに対しては無関心な態度をこえて、邪魔物扱いにさえした。彼はもはや、この母の子供ではなく、全く他人として扱われるようになってしまつたのである。フレーベルが丁度五歳の時である。一応周囲の事物に対する判断がついてきた時期、その時期にこのような体験をすることは傷ましいことだつた。「私は少年時代の初期に既に全く孤独を感じ、そして私の魂は悲哀に充たされていた。」と自伝にも記されている。この体験はもともと内向的であり、敏感な彼の心に一層拍車をかけた。環境は激しく彼の生活に迫つて来たのである。母親とフレーベルの間の此の様な葛藤を利用して、母親のことを彼に悪く告げる人もあつたし、又無実な罪を負わされ、不当に罰せられることも屢々あつた。子供の心にとつては耐え難いようなこつた事柄に囲まれて、彼の闘いは自己の心の

内部に向つていつた。自己感情と道徳的自負心が彼の心の中に芽生え、外的活動ではなくて内的活動に沈潜するようになった。この時に培われた自尊心と、冥想癖とは生涯を通じての彼の伴侶となつたのである。屋敷と教会とに囲まれた庭から生籬ごしに山を眺め、又頭上の空を仰ぎ、山地の新鮮な空気を呼吸しながら、一人ぼつねんと立つている、年よりはまされた、内向的な少年フレーベルの姿を思い浮べることが出来る。

フレーベルの父は前述の様に牧師であり、厳格にして真面目な人間だつた。朝晩家族の全員が集まり、礼拝が行われたこの時間はフレーベルを宗教的冥想へと誘ひ、彼の宗教的感情を培つた。それによつて彼は「飽くまでも勇敢になりまた善良になりたい」と繰り返し繰り返し、且つまた深く感動した心を以て、少年らしい決心をした。

二 少年時代

一七八九年、満八歳になつた時、彼は村の公立学校にやられたが、間もなく父の意見によつて、女子小学校に通うことになつた。此の学校には「清楚と安静と優雅と秩序と」が支配しており、内向的な彼の心には全く適していた。以下少しく彼の少年期の経験に触れてみよう。

此の女子学校への入学は彼にとつては「一層高い精神生活への誕生であつた。」此の学校では毎週聖書の文句を一章ずつ暗記することになつてゐた。最初の週に彼に決められた文句は、マタイ伝第六章の「汝先ず神の國を求めよ」云云の一句であつた。此の句が莊嚴な調子で唱えられる時、彼は心の中に深く生命の基礎と救済とを印象づけられた。そしてつと後年になるまでこの印象は生き生きとして保たれて、彼の心に勇気を与えた。日曜日に歌う讚美歌も亦深い感激を与えた。「わが心も靈も高く昇れ」「基督者たることの尊さよ」の二つは特に印象的であり、「恰かも二つの輝やく星のように」彼の「幼い生命の暗いそして怖ろしい黎明を照した。」毎週月曜日にきく父の説教、それは比喩的、直観的な言葉が多く、難解なものではあつたが、發達途上にある若い心情にはかえつて直観的に容易に把握されることもあつた。そしてその説教において語られたことは彼の心の糧ともなつた。フレールの思想に流れる宗教的傾向の源を、少年期のかかる経験にまで追及することが出来よう。

父の家には多くの人々が悩みを抱いて相談に來た。フレールはその間に起る出來事を屢々目撃し、「切り刻まれて重荷を負い、引裂かれ寸断された人間の生命が、この五千人の社会生活において、彼等の真面目なそして厳格な牧師の注意深い眼の前に如何に現われて來るかを見た。」彼らの問題は

大概夫婦關係や性的問題だつた。そして少年フレールの心には何故に人間のみ男女に分れて作られており、その故に多くの苦惱が生れるのかという疑問と悲哀とが生じた而るに或る日、彼が榛にしほみの蕾に紫の蕊のあるのを見つけて喜んでゐると、偶々帰省してゐた長兄のクリストフが、花にも両性の區別があるのを注意してくれた。これによつて、性の區別は人間にのみあるのではなく、全自然界に拡がつてゐるということを知ることが出来た。そしてそれ以來、人間の生活と自然の生活とは彼にとつて不可分離のものとなり、彼の疑問は解決された。幼時より森林地方の美しく自然に触れ、人間との交わりよりもむしろ自然との交わりを好み、自然と触れつつ自己の心の奥へと沈潜していつたフレールであつたが、今や彼の心には人間界と自然界とが根本的には同一の法則が支配してゐるといふ觀念が臆げながら生れて來たのである。そして四十年たつた後に至るまでも榛の花を見れば、それが天使のように自然という大きな神の宮居を開いてくれるように思われた。

此の頃長兄のクリストフは大学に在學し、神學を學んでゐた。父は旧式の神學者であり、兄はその頃盛になりつつあつた批判哲學に影響され教義に対しても批判的な態度を持つてゐた。そのために兩者の意見は屢々相違を來した或る日のこと、宗教上の問題から、父と兄との間に爭論が起り、父は激

昂して一步も譲ろうとしないし、生れつき穩かな兄も燃えるように赤くなつた。二人とも共に、それぞれ真理と思うことを固持して譲ることが出来なかつたのである。その後も屢々父と兄との間には論争が展開された。フレーベルにとつては兄の方が正当と思えたが、父の見解も又誤りとは考えられなかつた。これらの論争を通して、彼は「いかなる謬見にも、屢々それを發作的に固執するまでに人を釣り込む真理の一面があり得るということに悟つた。」そしてその後決して何れか一方に味方するということをしなかつた。一面、極度に内向的であり、偏屈にすら見えるフレーベルにおいて、少年期におけるかかる体験の敘述を見ることが出来るというのは、彼の心の中に本質的に育くまれている素直さを示すものではないだろうか。

父が牧師である關係上、「基督を身に体し、基督の生活を實現する」ということは屢々父から要求され、語られて来た彼も又それを非常に大切なことと思つてはいたが、それを果すことは困難であり、不可能であると思つていた。その矛盾がいかにして解決されたかは明らかではない。恐らく、彼獨特の直観によつて感得したのであろう。「人間の本性そのものは元來人間をしてイエスの生活を再び純粹に生活し且つ實現することを不可能ならしめるものではなくて、却て人間は若し彼がそれへの正しき道を歩むならば、純粹なイエスの生

活を獲得することが出来る」と知つた。そしてこの思想が後に彼の「生涯の眼目」になつたのである。

此の間にあつてフレーベルの家庭における生活は決して安定したものではなかつた。家庭の冷い空気が彼の身にひしひしと迫つてきた。以前にはただ内向的に沈潜していたものが彼の心身の發達と共に次第に明瞭な形で表現されて来た。彼の心には以前よりも一層明らかな形で、価値判断が育くまれて来たし、自我意識が現われて来ていた。異母弟妹と遊んでいる時に、そのいたすらはすべて彼の責めとなつたし、母はすべてのことにおいてフレーベルを悪く云い、父は事情を調べる暇がなくそれを信じた。彼は「とうとう嚴罰を怖れて、最も無邪氣な行爲をさえも隠すか、或いは尋ねられた時に平気で不実のことを述べ立てるようになった。」少年の生活において、この様な環境は最も慘めなものであり、不健全なものである。フレーベルの心は内的反省に絶えず向つていたから、極端に外面的反抗に走ることはなかつたが、それでもその生活は憂鬱なものであり、何処にか救いが求められねばならなかつた。長兄クリストフは此の様な時期にあつて、常に弟の辯護人となり、理解者となり、楯となつてくれた。フレーベルとこの兄とは、この後しつかりと結ばれることとなり、フレーベルは何か事ある毎に此の兄に相談をし、又兄はその後

すつと死に至るまで、フレイベルの良き理解者であつた。丁度此の頃、この苦窮のフレイベルに全く外部から救の手が伸ばされた。それは、偶々母方の伯父ホフマンがフレイベル家を訪れた。此の伯父は経験に富んだ、優しくて愛情に充ちた人であつたが、彼は直ちに此の家におけるフレイベルの立場を看破した。そして出発後直ちに、フレイベルを引渡すように父に乞うてきた。そして父は又喜んでこれを承諾した。

一七九二年、満十一歳の暮、彼はシュタットイルムの伯父の許に引きとられ、そこから同年輩の少年達の学校に通ふこととなつた。此の時から約五年間、フレイベルにとつては、比較的楽しい幸福な生活が恵まれた。「父の家には厳格が、そして此処には溫和と親切とが支配していた。彼処では私は私に關して不信用を見たが、此処では信用を見た。彼処では私は束縛を感じ此処では私は自由を感じた。」と云う自伝における述懐は、彼が此の伯父の許で如何に以前と比べて安定した生活を送ることが出来たかを物語るであろう。今や彼は「此処で長い息をついて新鮮な生命力を吸いこんだ。」彼は「心情の自由を得、そして身体は強健になつた。」世界は彼がそれを充たし得るだけ彼に解放されていた。内向的のみ偏つていた彼の性格に、外面的な活動の自由と機会とが与えられた。

伯父はやはり牧師であり、シュタットイルムの地方監督を

していた。日曜日には彼は伯父の説教を十分に聴いた。彼の説教はその人格や生活と同様、「靜かで、穩かで、愛情に溢れていた。」

此の時代における彼の大きな楽しみの一つは、学校の宗教教授の時間だつた。伯父に云わせれば、それは「余りにも哲學的であつて、この程度の者には往々理解が困難」だつたけれども、「この教授は十分に私を啓蒙し、生氣附け、溫め否なせるところか私を灼熱させたので、特にイエスの生涯や仕事や性格が述べられる時には、私は屢々内面的に本當に療かされたのである。その時私はさめざめと泣き、何時かは私もこれに似た生活を送ることが出来るという、いとも確固とした憧憬が私の心に充ち満ちた。」と自伝に語られている父の家において培われた宗教的感情は寧ろ、激しいものであつたが、伯父の家ではそれに人情味と柔かみが与えられ、更に青年期に入つて浪漫的な傾向が強くなると共に、その宗教的感情が自分のものとなり、血が通つて生き生きと動いて來たと考えられよう。

学校休暇中に時たま両親の家に歸る時より他は、このようにして大部分が伯父の家で過され、愉快な学校生活と、そして靜かな平和な家庭生活とを味わいつつ、數年間が過ぎた。乍併かかると平和はいつまでも味わつていられるものではなかつた。成長と共に、今や新しい波瀾が彼を待つていた。

三 林業見習

彼は何か市民的な職業に就かねばならなかつた。彼自身はもつと學問を続けられる様な道を選びたかつたが、上の兄二人が既に學問に身を委ねていたので、フレイベルには學問をさせない、ということには既に継母の意志によつて確定されていたものだつた。当時最も生活の安定する確實な職業は、大藏省か稅務局の官吏であり、その職を得るには、その下級官吏の書記になつて入るか、又は最高官吏の召使になつて入るか何れかであつた。父は此の職業に彼を就かせようと思つたが、前者の道は種々の事情から不可能だつた。併而後者の道は彼の自尊心が許さなかつた。そこで彼の希望が考慮されてウィッツという林務官の徒弟となり、農業に志すことになつた。フレイベルは山野森林を好んだ。そして農業を職とすることに大きな喜びを抱いた。

一七九七年夏至の日、十五歳三カ月の時、フレイベルは林務官ウィッツの弟子入りをした。ウィッツは能力はあつたが人を教える術を知らず、その上、仕事の忙しさにかまけてフレイベルに約束の教授をしなかつた。このことは反つて彼にとつては幸いだつた。彼は全く自由な時間を此處で得ることが出来た。此の間の生活は自伝に述べられているように、「第

一には比較的家庭的なまた實際的な生活、次には自然特に森林における生活、次には数学や語學に献げた書齋における生活、次には植物學に献げた生活である。」此の間にあつてもその生活は隠遁孤独であり、冥想に耽ることを好んだ。そして自然と森林とは彼の最も良き友であつた。

一七九九年の夏至の日、此の徒弟期間は満期になつて、彼はオーベルワイスマットへの家に歸つた。

四 イエナ時代

偶々イエナで醫學を専攻している兄に急に送金せねばならぬということが起つた。そこで丁度仕事をしていなかったフレイベルが使いにゆくことになつたが、大學の活氣ある生活に打たれて暫らく滞在することを父に乞ひ、その希望は容れられた。その頃イエナ大學ではフリードリッヒ・シラーが歴史學を担当し、シェリングが哲學を講じて居り、大學は極めて活氣を呈していた。彼の知的要求はかかる環境にあつて、次第に強烈となり、更につづけて勉強することを父に乞うた。その専攻希望は財政學であつた。不十分な母の遺産を學費にするということ、どうやら此の希望は容れられた。

イエナにおける講義は彼にとつて必ずしも満足できるものではなかつたが、多くのものが与えられた。特に余体を内

的關聯において捉えなければならぬ、という思想は此の間において把握されたものであつた。又イ・ナ滯在中に、自然研究の団体と、鉱物学団体と二つの學術団体に屬し、彼の學問的情熱が呼び醒まされた。

かくて一年半靜かな學窓生活を送つた時、經濟的困窮が彼を襲つた。兄に貸した手形の一部が返してもらえず。そのため學費が続かなくなつたのである。のみならず食堂から借りた金が返せなかつたため、當時の大学の規則に従つて大学の監禁室に入れられた。始めは父が助けて仕拂つてくれると思つていたが、継母が父の不機嫌をかき立て、遂に九週間を監禁室で過すこととなつた。その罰は、大學裁判の席上で父の遺産相続の權利を放棄すると云つたのが父を満足させたことによつて、許されることとなつた。

一八〇一年夏、彼は重苦しい胸と暗い心情と圧迫された精神とを抱いて、両親の家に歸つた。

父の家に歸つて数カ月の後、ヒルトブルクハウス地方の農場に実地見習に出たが、それは余り興味を引かなかつた。此の間にあつて彼の心を痛めたものは、屢々見られた様な父との間の無理解であつた。彼は父を尊敬していた。老齡に至つても尙、真面目な堅い説教をなし、嚴肅な意志を持つと共に高尚な犠牲的精神に充ちて、真理と道德と正義とのために闘ひ続けていた父の姿を、彼の真率な心は崇拜せざるを得なかつた。

つた。而るに自己の内的な努力と傾向とを父が理解してくれないといふことは、純真な青年にとつて大きな悩みだつたに違いない。「父は老いていて墓場に近いといふことを私は知つていた。さればこそこのやうな父に理解して貰えないことは、私にはいとも悲しいことであつた。私は父を愛した。そしてこの愛が齎らす恵を屢々感じた。」と彼は述べている。彼は自己の内心を父に手紙で知らせようと思つた。丁度その頃に、父は病に倒れ、彼は家に呼び戻された。そして此の最後の時になつて、手紙で伝えられる筈だつたものが、直接に言葉により、眼によつて伝えることが出来た。一八〇二年の二月、此の父は臨終の際までフレイベルの行末の心配を胸に懷いて逝つた。

彼は今やあらゆる点で自由の身となり、自分の生活を自分で決めることの出来る身となつた。丁度二十歳の青年であつた。内向的にして自己反省的な悩み多き青年フレイベルは何ものかを求めて魂の放浪を始めるのである。

五 職業彷徨

その年の復活祭に、彼はバンベルクの近くにある稅務・山林・十分の一稅局へ山林書記となつて赴任した。この地方は極めて美しくしい土地であり、彼はその自然を満喫した。偶々

長官の家の家庭教師と意気投合し、親密に結ばれることとなつた。此の友人が後に彼の運命を拓く媒介となるとは極めて奇しき邂逅である。さて此の書記の仕事は、極めて楽しい境遇を彼に提供したにも拘らず、彼はそれに満足することが出来なかつた。彼の求めて已まない精神は、外的境遇の安定に留まることは出来なかつたのである。

一八〇三年の春の初め、彼はこの地位を棄ててバンベルクの土地測量の仕事に携わつた。その間に彼はシェリング派の若い哲学博士と知り合い、シェリング著「ブルノー或いは世界精神に就いて」を勧められて読み、強く印象づけられた。或日二人で絵画館を見物した後で、友はフレイベルに云つた。「哲学には君、用心し給え。哲学は君を疑惑と闇とに導いて行くよ。」フレイベルの極度に内省的な性格と、人生の真理を求める真剣さに、哲学がどの様に作用するかを、此の友は明らかに見て、危惧を感じたのであろう。

バンベルクの仕事は外面的にも、必らずしも彼にとつて安定した職業ではなかつたので、もつと確実な仕事を彼は欲した。偶々新聞広告に応じて、建築上の作品を送り、それが認められて、メクレンブルクリシュトレッツの長官、フォン・デヴィッツの個人秘書の地位を得た。

一八〇四年の厳寒物凄二月の冬の日、彼は駆馬車に揺られて赴任の途に向つた。ここで彼は歓迎され、大きな農場

経営の会計を親しく見学する機会が与えられた。此の仕事は不満足なものではなかつたに拘らず、彼の心の内には早くも「従わずにはおられぬ一つの星が昇つていた。」彼にはかかる地位はどうしても本職として考え難く、何か他に自分の打ち込む本業が見つかつたら、それを捨てるべく運命づけられていた。

丁度その頃、彼を心から愛してくれた伯父が死んだ。此の伯父は彼の母の兄であり、彼女を心から愛し、又フレイベルを心から愛していた。そして彼に対して遺産を少し残してくれていた。フレイベルの興奮し易い性質、外見移り気の安定しない性情を心配していたのであろう。彼は長兄クリストフに対し、フレイベルが、「今占めている地位を決して捨てぬように阻止するために全力を尽くせ」と命じた。それにも拘らず、彼の精神は「忽ちまた一層高い教養の必要をいとも痛切に感じた。」彼によれば、「神意の望むところ」は伯父の意見とは違つていたのである。

これより少し前より、彼は教学者であり、物理学者であるウォルワイデ博士と会うことにより、科学に対する情熱を目覚められており、次第に建築術に志すようになっていた。偶々前述の家庭教師である友人がフランクフルトで建築業の就職の斡旋をしてくれるという話になつた。所がその旅費の工面の点で彼は困却し、常に彼の理解者である長兄のクリストフ

に手紙で援助を乞うた。彼の心には些かの遲疑がないではなかつた。余りに職を移り易い心は此の立派な兄をも怒らすかもしれない。兄の返事が来て、それを開封するまでに数時間、それを読むまでに数日間、彼はそれを持ち廻つた。数日間希望と疑惑との間を動揺した後、開封した彼は、そこに極めて同情的な言葉と、それから愛する伯父の訃音と共に遺産のことが記されてあつたのである。「今や決定の闇は投げられた。」

一八〇五年四月末、満二十四歳を迎えて、彼は今までの地位を放棄し、将来の建築師として、すべての友に別れを告げて、ウツカーマルクに親友を訪ねた。此の美しくしい土地で、彼は未来への希望に燃えて、「花から花へと胡蝶のように楽しく飛び廻つた。」彼は「自然の彩られたそして真珠で飾られた衣裳そのものを心から愛し、そして私の青年らしい歓喜を以て心から自然に愛着した」とその希望に満ちた喜びを記している。彼には今や畢生の仕事が定まつていた。それは「人間の生活を矛盾から解放する或る美しい、確實な、単純な道」、「人間そのものを再び『平和』ならしめるような道」、その道を求めること、であり、そして外的な意識は建築業に向つていた。その頃友人が記念帳に何か書いてくれと頼んできた。彼はそれに、次のように書いた。

「君は人間に食物を与えよ。人間自身に人間を与えること

こそ私の努力であつて欲しい。」彼は自分で書きそして云つたことが分らなかつた。もし解つていたら、それほど強く建築師になることを固執し得ただらうか。

美しい春の季節の幾週間かの旅行の後、夏至少し前彼はフランクフルトに着いた。そして彼の建築師の希望は近く実現される運びとなつた。それと共に、彼の心の中は再び動揺し、心の中に自問自答し始めた。

「如何にしてお前は建築術に依つて人間としての甲斐ある活動が出来、また人間の教育と人間の向上とに尽くすことが出来るのか。」

「この間に対して私は自分の気の落ち附くようには答へたが併しこの職業において右に述べた目的に適うような結果を収めることの如何に困難であるかということをば、私は如何とすることが出来なかつた。」と彼は自らその当時を顧みて述べている。

丁度その頃、彼の件の友人は、フランクフルトに創立された模範学校の当時の校長たるグルーナー氏にフレーベルを紹介した。そこには若い教師達もあり、忽ち人生の種々の話題に及んだ。彼は打ち明けて話し、自分のありの儘の姿、自分について知つていふことも知らないことも皆な話した。するとグルーナーは彼の方に向き直りながら云つた。「おお、あなたは建築業はお廢しなさい。それはあなたには適しません

教師におなりなさい。私の学校には教師が一人欠けています。御同意でしたらこの地位はあなたに上げます。」と。偶然にもその時、或る人に託してあつた彼の証明書全部が紛失したという通知を受け、就職の上の困難も来した。彼は今や「神意そのものが、このような事情に依つて私の爲に退却の橋梁を破壊したのだ」という風に考え、それ故に長く躊躇することなく私に差伸ばされた手を勇み喜んで掴み、そして間もなくフランクフルト・アム・マインの模範学校の教師になつた。

青年フレイベルの不安定な精神の動搖は一応此処に解決を見出したかに見えた。始めて九歳から十一歳までの三四十名の男児から成る学級を持つた印象を、彼は早速兄クリストフに手紙で送つてゐる。

「私は何か自分でも知らなかつたもので、而も長く憧憬し長く見失つていたものを発見したような、また終に私の生命の要素を見出したような気がした。私は水中の魚・空飛ぶ鳥のように幸福である。」

六 教師を志す ベスタロッチ訪問

廿四歳にして始めて教師の職を天職と意識し自覚したフレイベルの戦いはこれで終末を告げるであらうか。否。かくも

動搖し、究極のものを追い求めて彷徨つた魂が、一応の安定点をここに見出したとしても、それでその遍歴が終ることは考えられない。彼は更に自己の向上と、教育における窮局のものを求めて遍歴の旅を続けるのである。

教師を志したフレイベルは、三日後にはもう、かの偉大な教育者ベスタロッチに教を乞うべく、イヴュルドンに向つて旅立つてゐた。彼の滞在は今回は僅かに四日続いたのみだつたが、もしもつと長くベスタロッチの許に留まつていたならば、彼のような気分のものにあつては、心臓も心情も精神も破滅してしまつただろうと告白している。彼はしかし同時に、すべてにおいて満足したわけではなく、教授法における種々の不統一、欠点を感じ、又、早くも当時のイヴュルドン学園の不幸な分裂の微かな徴候に気がつてゐた。イヴュルドンを辞してフランクフルトに帰る時、別れに當つてベスタロッチは彼の記念帳に次の文句を書いてくれた。

「人は自己の目的への道を、思索の焰と言葉の火花とを以て、切り開くのである。けれども彼はただ沈黙と実行とに依つて、この道を完了した自己をも完成する。」と。

グルーナーの許で教師をする傍ら、彼はホルツハウゼン家の三人の子供の家庭教師を依頼された。これらの経験を通して彼は始めて、今までただ主観的なもの即ち自己教育としてのみ知つてゐた教育を、初めて客観的なものとして見ることに

が出来た。それは彼も告白している如く、「確かに苦しかつた行爲である。」

グルーナの模範学校において、彼は自己の職業を見出しよく働らき、そして彼の教授ぶりは好評を収めた。外部的には何ら破綻の原因となるものはなかつた。「しかし一つの大きな学校の組織された全体には鞏固な形式があり、確實な、承認された、外部的には予め時間と目標とに適うように規定され得る課程が有つて、総ては時計仕掛けのように互に噛み合つていなければならぬ。」而るに彼の目覚めた生命と精神とは、形式によつて化石してしまふことに堪え得なかつた。彼は当時アルントの「人間陶冶に関する断片」に共感を感じた。「その足をば神の地上に着け、自然の中に根を下して立ち、その頭は天まで高く聳え、そして天を直視しつづその真相を読み、その心臓は地上と天上、地上と自然との兩者の千態万状の生命と天上の晴朗と平和、神の地上と神の天上とを統一する人間を私は教育する。」というアルントの語は、当時の彼自身の姿を描いたものかの如く思われた。彼の心には、この模範学校に対する義務から解放されたいという希望が次第次第に芽生えてきた。校長グルーナもそれを認め、彼は教師としての責任から解放された。学校退職と共に彼には新しい運命が待つていた。彼には常に古い型に満足出来なくなると、自己の向上を求めてその型を飛び出し、そして

又別の型が彼を待つてゐる、その止揚から弁証法的に彼の精神は發展するという経過を辿つてゐる。今まで彼が部分的に三人の子供の面倒を見ていたホルツハウゼン家では、全面的に面倒を見る家庭教師を求めており、その推薦をフレイベルに依頼して来た。乍而彼の探したような、活潑な内的生命を持ちながら同時に知識と世間的経験を有つた人間を探し得べくもなかつた。自由と無拘束を強く望んでいた彼に対して、ホルツハウゼン家ではその家庭教師となることを要求はしなかつたが、彼はかかる数カ月を経た後、少年達に対する心からの愛を以て、母親のような真心ある世話をしてやることに価値を認めた。彼の申入れは感謝して受け入れられた。

一八〇六年七月、二十五歳になつたフレイベルは、ホルツハウゼン家の三人の子供と共に郊外の田舎家で生活を共にすることとなつた。此の生活に入るや否や、彼には又もや、自己の教育の欠陥を除くために大学教育を受け、それによつて自分を教育して教育者になりたいという願が強く起り、此の仕事を直ちに放棄しようとして、長兄に相談の手紙を出した。しかし今回は自ら思い留まつて、追つてその決心を長兄に告げた。そしてそれと同時に彼の心に教育及び教授に対する最高の自己活動が始まつた。彼の努力の対象となつたことは自ら共に生活することが真正の教育であるというはつきりした感情、及び、基礎教授とは何か、一般に教授の対象は何

であるかという疑問だつた。この間にあつて彼の念頭に浮んだ最高原理は、「総ては統一に基づき、統一から出発し、統一に向つて努力し、統一に至り、そして統一に還る。」ということであつた。彼は心から朗かにまた愉快に子供達と共に生活し、人間生活の養育は自然生活の養育と結合していることを悟つた。彼は最善の教育を与えるべく熱心に骨折つたが、しかし彼の当時の段階としては、彼の目標にまで達することが出来ないと思つた。それと同時に、彼はペスタロッチーの許で学ぼうと決心した。

一八〇八年、彼は三人の子供をつれてイヴュルドンに赴き、彼らと共に彼自身ペスタロッチーの生徒となつた。ペスタロッチーの許で過した二年間は彼にとつて実り多き期間であつた。此の間に彼はペスタロッチーの息吹に朝夕親しく触れその教授法を徹底的に学んだ。しかしペスタロッチー学園には既に暗い蔭が射していた。教授法における不統一、不調和のみならず、「総ての善きものと悪しきもの、総ての有益なものと有害なもの、あらゆる長所とあらゆる弱点、あらゆる間隙とあらゆる充実、あらゆる我慾とあらゆる無我の献身は、ペスタロッチー並びにその友人達の所で」示された。

ペスタロッチーの許で経験した内的統一性と必然性との欠乏は、彼を駆つて、更に知識を得るために、大学に入学しようと思つた。

一八一〇年、彼は三人の子供と共にイヴュルドンを去つた。

七 大學時代 鉱物博物館助手

一八一一年七月初め、満五年の家庭教師生活を離れて三十歳に入つたフリーベルはゲツラインゲン大学に行き、待望の学生生活に入ることが出来た。長らく宿望の生活を漸やく得た彼は、「今や自由であり、幸福であり、精神的にも身体的にも健全であり、快活であり、彼の「内部と外部とは平和であつた。」最初言語学に、後に物理学、化学、鉱物学等の自然科学が彼の主たる興味の対象であつた。思ひ存分講義と研究と思索とに耽つて、「終日独りで暮した後、せめて落日の輝いている懐しい光でも浴びようもの」と、夕方遅く散歩に出掛けた。精神と身体とを強くする爲に、遅く夜中頃までもゲツラインゲンの美しい周囲を散歩した。星明らかな空は私の内心とよく調和した。」彼は心ゆくまでこの生活を味わつたのである。而るに又もや彼の生活には経済的破綻が萌して来た。そしてその時に又しても思ひがけない所から援助の道が開かれた。それは、彼の母の妹である叔母が急死し、その遺産が彼に与えられたのである。前には母の兄が、今度は母の妹が、フリーベルに道を開いてくれた。彼の母は幼ない時

にフレーベルを蔑して去つたが、その代りにその愛する兄妹が、彼の行先を祝福してくれたとは、何と奇しき運命であるうか。

一八一二年九月、彼はベルリン大学に轉學し、主としてワイス教授の許で鉱物學を研究し、傍らブラーマンの學校で教師として働らいた。ワイス教授の講義は彼の心を強く捉えた。

一八一三年、ナポレオンの大軍が撃滅され、プロシヤはこれに對して宣戰を布告した。プロシヤの国内には祖國愛の感激に燃えた民族意識が勃興した。すべての人が戰爭を口に叫んだ。「祖國ドイツの過去の光輝と名譽とへの大いなる神聖な憧憬が若人の胸の中に炎々と燃え上り、」各処に義勇団が組織された。彼はプロシヤ人ではなかつたし、又戰爭に出る何らの義務もなかつた。しかし乍ら彼は思つた。「苟くも武器を執るに耐え得る青年が、兒童及び少年の祖國を血と命とを以て守りもしないで、彼らの教師と成り得るなどとは全然考へることが出来ない、」し、「また今卑怯にも怖れて退くことを憚らないような青年が、後年赤面することもなく、また彼れの生徒の嘲笑や輕侮を受けることもなく、その生徒を何等かの偉大な事柄や犠牲と献身とを要求する事柄に感激させ得るなどは考へることも出来ない、」と。彼は敢然リュッツォ軍の歩兵部隊に身を投じた。此の戰爭はフレーベルに生涯の友人であり、又同業者を結びつけた。それはランゲタ

ールとミッデンドルフの二人であつた。知人のない軍隊生活において、三人は忽ち意氣投合し、種々の事柄に就いて語り合ひ、人間及び人間の教育は彼らの散步や戸外の生活において屢々且また多く話題になつた。

一八一四年七月、義勇軍は解散され、彼は軍隊生活を全く不満足の感情を以て去つた。軍隊生活は彼の要求していた内面的なものを何も与えなかつた。それと共にフレーベルはワイス教授の紹介によつてベルリン鉱物館の助手の地位を得た。満されぬ心を抱いてデュッセルドフからベルリンに歸る途中、彼は「不断的渴望的な憧憬を以て、」道すがら多くの美しい風景や花園を巡視した。その中に「エフ」という花園に立ちより、多種多様に彩られた花を眺めたが、どの花も彼の心に満足を与えなかつた。そして氣が付いたことは、そこに一本も百合の花がない、ということだつた。

以下自伝からその部分をそのまま引用してみよう。「私はその花園の所有者に『貴下の花園には百合の花はありませんか』と尋ねた。するとこの人は靜かに『ありません』と答えた。これに對して私が驚きの情を表わすと、彼はまたもや靜かに『誰もまだこの花園に百合の花のないのを残念がつた者はありません』と云つた。しかし茲に至つて私は自分が何を恋しがり、また何を求めているかというところが解つた。このことを私の心は次の言葉よりもつと美しい言葉で言い表わ

すことがどうして出来たろう。『お前は心臓の静かな平和と生命の諧音と魂の清澄とを靜かな、明るい、單純な百合の花の姿のうちに求めている。』種々様々の美觀を呈しているこの花園も、百合の花がなくては恰も統一と調和との欠けた、眼前を過ぎ去る雜然たる生活のように私には見えた。他の日は散歩をして田舎の或る家の庭に美しく咲き榮えている百合の花を見た。その時の私の喜びは大きかつた。併しそれは一つの垣で私と分離されていた。』

八 カイルハウへ

一八一六年十月、約二カ年間のベルリン鉱物館の助手の地位を去つた。これより前一八一三年戦争直後、彼の最もよき理解者であつた長兄のクリストフがチフスで死に、此の年に未亡人は遺児の教育をフレイベルに託したのである。彼は此の報に接するや、大学教授招聘の榮譽もすべてを投げすて、愛する兄の遺児の教育へ、彼の夢である人間教育へと一目散に走つた。

一八一六年の晩秋、フレイベルは長兄の遺児三人に、次兄の子供二人を加えて、イルム河畔のグリースハイムに、「一般教養教育所」という名で、教育事業を起した。十一月十三日、フレイベル三十四歳の時である。翌年には親友ラングタ

ールとミツデンドルフを加え、場所もカイルハウに移つた。子供の數も次第に増した。

一八一八年九月、彼は子供や兄弟の殖えた家庭の爲に主婦を迎えた。彼女はヘンリユッテ、ウイヘルミネと云い、シユライユルマツヒヤーとフィヒラに師事した教養高き才媛であり、ベルリン鉱物館助手時代に、知り合つたものである。

彼は「自然と兒童とに対する私と同じ愛と、教育と人間らしき生活の実現とに対する私と同じ高い努力的な心とが、彼女を私に結合させた。」と云つてゐる。彼女は学園のすべての者から愛され、情愛深く待遇され、死に至るまでフレイベルとの愛情は濃やかであつた。時にフレイベル三十六歳、ウイヘルミネ三十八歳である。

フレイベルは齡正に人生の半ばに至り、漸やく青年期的動搖を脱して、その心は固く教育に結びつき、以後は彼自身の教育事業に没頭する三十余年が続くのである。そして幼稚園が創設されるまではまだ二十年の歳月が必要だつた。以下暫らく簡単に彼のその後の生活と経歴を眺めてみよう。

一八二〇年まではカイルハウ学園の設立のために激烈な生活上の戦が続いた。一八二〇年昇天祭の日に、オステルオーデに住んでいた次兄が、全家族をつれ、全財産を提げて、フレイベルの事業に協力に來た。一八二五年までに、カイルハウ学園はその協力者、ミツデンドルフ、ラングクール、パー

ロブの献身的な協力を得て、その事業は最盛期に達し、児童数は五十六人にまでなつた。且つ、此の間に所謂カイルハウ小論文と云われる七つの論文が次々にフレールベルの手によつて発表せられ、一八二六年、四十四歳の時その主著、「人間教育」の大作が公にせられた。幼児教育の思想はその中に既に明らかにされている。しかしこの時すでにカイルハウの学園には衰頹の兆が見えていた。即ちその原因は、一つには政府がこの学園に自由主義、社会主義の嫌疑をかけたこと、二つには経営難であつたことが考えられる。この間にあつてもフレールベルの教育に賛成し、絶大な支持を与えるものもあつたが、大勢は如何ともし難く、一八二九年には僅かに生徒六人に減じてしまつた。フレールベルの此の間の失意と焦燥は察するに難くない。しかし彼はかかる事情にあつて毫も自己の所信を曲げず頑なと思われるまでに、自己の真理を確信し、その鋒先はむしろ社会に向けられた。彼は自伝において次のように述べている。「人間であれという要求は……まだ一般の人々には余りに大袈裟で、理解が出来ないように私には思われた。……独逸人になれとかいう要求でさえ、既に余りに大袈裟過ぎて余りにも理解が出来にくかつた。何故かと云えば誰でも次のように云うからである。葺が葺である如く、私は私の生れつき既に独逸人である。それになる爲に或いはそれの爲に、果して尙お多くの教育が必要であらうか——況や

人間になる爲に多くの教育が必要であるというにおいておやであると。」彼がもしも「召使や下女、或いは靴屋や裁縫師を、或いは商人や実業家を、或いは軍人を、いやいつそのことに貴族をも只管に養成する学校として広告したら、」彼の教育所は有用と認められ「私も世界と國家とに認められる人間になつたかもしれない。而も若し私が人生と國家との機械になつて、機械を彫刻したり模塑したりしたならば、尙お更ら二重にそうなつたかもしれない。併し私は只管に自由な思索的な、活動的な人間を作りたいと思つた。ところが自己の爲にまた子供の爲に自由で、思索的で、そして自己活動的な者が誰かあるであらうか。自由で、思索的で、自己活動的な人間を認め得る者が誰かあるであらうか。だから独逸人を教育するということが既に愚かなことで、況や人間を教育するということはこれにも増して愚かなことであつたらう！」

當時の一般の教育に対する関心と水準を考え合わせる時、フレールベルの苦衷は察するに難くない。

かかる苦境の中にあつて、マイニンゲン公にあてた書簡が一八二七年に、フリードリッヒクラウゼにあてた書簡が一八二八年に書かれている。何れも自伝の形で苦窮を訴えたものである。

カイルハウの学園の経営難その極に達し、一八二九年、マイニンゲン公の援助によりヘルバに国民学校の設立を計画す

るが、種々の事情から挫折する。此の間にあつてもカイルハウは日に日に衰運に傾き、遂にフレールベルは後事をミッデンドルフに託して、瑞西のワルテンゼーに、続いてウィルソニーに学園設立を計画するが、何れも目標を達し得ず、茲に、一八三五年五月末、彼はベルン州政府の招請に応じて、ブルケドルフの孤児院長となつた。此の間に彼の教育思想は次第に円熟し、今や次の事業の内的な基礎が固められつつあつたのである。

翌年には「一八三六年は生活の革新を要す」と題する一文を草し家庭教育の重要性を説いた。

たまたまウィルヘルミネ夫人が健康を害したのを機会に一八三六年五月十四日、彼はブルケドルフを去り、カイルハウに帰つたが、翌年一月、居をブランケンブルクに移し、いよいよ、非常な熱意を以て、彼の教育思想の実現に邁進する。

一八三七年、彼はここで、彼の創案になる教育用遊具の製造を企図し、「自己教授と自己啓発への直観教授研究所」と命名した。いよいよ生涯の仕事たる幼児教育にのりだすのである。フレールベル五十五歳の時である。翌年に入つてから遊具の製造は実際に行われ、その遊具は当時、「幼児少年用遊戯及び作業園」と命名された。後の恩物である。それと共にこの研究所も「幼児少年作業活動教養研究所」と改名せられた。乍而此の機関は名前によつても分るように、單なる遊

具の製造を事とするのではなくて、その遊具は子供の精神の働らきに材料を与えるための媒介物であり、あくまでも自己活動による教育事業を目指していた。これから約二年間、彼は此の遊具の普及と、彼の教育理念の宣伝のために、各地を巡歴して講演旅行に費した。その間に一八三九年三月、元来蒲柳の質であるウィルヘルミネ夫人が病死した。フレールベルはひどく悲み、死を悼んで次の如く云つてゐる。

「仮令蒲柳の質とは云え、尙おも彼女は精神において聴く愛において強き、主婦らしい内助の力となることが出来た。カイルハウの学園において、ウィリザウの学園において、ブルケドルフの学園において、そうして最後にはまた幼児の教養に捧げたブランケンブルクにおける学園において。人類の幸福に対する愛は彼女の強味であり、神が彼女に任せた、子供に対する忠実な世話は彼女の喜悅であり、彼女の夫がその全生涯を淨化した、愛に満ちたる仕事は彼女の賜物であつた。」と。

九 幼児教育者

その後暫らくの月を経て後彼は、ブランケンブルクに幼児教育者指導者講習会を始め、同時にここに四五十人の幼児を集められて毎日指導がなされ、これを「遊戯及び作業所」と

呼んだ。正に一八三九年六月一日であり、これが幼稚園の濫傷である。

此の幼児を集めて教育する場所に何か相應しい名前を附けたいものと彼は久しく考えていたが、一八四〇年、或る晴れ渡つた春の日、ミッデンドルフ達とチューリンゲンの森をカイルハウからブランケンブルクに通ずる峠路を歩み乍ら、ブランケンブルクの町を見おろせる所に差し加つた。ブランケンブルクの勝景が大きな花園のようにうららかな日の光に照り輝いているのを見て、彼は突然叫んだ。「これだこれだ、キングーガルテン(幼稚園)、これこそ新施設の名称として定まつた。」と。そして此の年の五月一日から、「遊戯及び作業教育所」は「幼稚園」と呼ばれるようになった。彼の目指しているものは、困苦しい子供の教育所ではなくして、文字通り、「子供の園」だつたのである。

迂余曲折を経て育まれて来た彼の教育理念は、今や子供の園、幼稚園において実を結んだ。久しく彼の抱いていた理想の教材は恩物によつて形を与えられ、それを利用して人間の教育をする場所は幼稚園に見出された。彼の齢も考齡に入ると共に、その思想は円熟の度を加えていつた。

幼児教育の指導講習を受けるものは、初めは男教員が多かつたが、フレーベルは幼児の保育と女性の使命、子供の教育と母親の使命とを深く結びつけて、考えるに至つて女性の教

育ということを深く考えざるを得なくなつた。一八四〇年六月二十八日、グーテンブルクの活版術發明四百年記念祭を祝して、一般独逸幼稚園の設立を計画し、その創立記念の式辭として幼児教育と保姆養成所の必要を論じ、参集の女性に多大の感銘を与えた。彼の叫びは正に一般独逸の全女性に向けられたものであつた。一八四四年には、彼の珠玉的作品、「母の歌と愛撫の歌」が美しくし絵入りで出版せられた。彼の母性教育の熱意と、豊富な心情とは此の一篇の中に結晶している。彼にとつては、今や此の一般独逸幼稚園を普及させ、各處に子供の園を実現することが畢生の目標となつた。併し乍ら現実は容易すくはその普及を許さなかつた。彼は各地において幼児教育思想を講演し、実演して歩き、一八四七年には國內に七つの幼稚園が設立されるに至つた。

十 リーベンスタイン

此の彼の教育理念の普及に忙しい日々にあつて、彼は常に幼なき子たちの友となることを忘れず、子供達との生活の中に浸ることを最大の喜びとしていた。彼の純粹な魂は老いて愈々童心に近づいていつた。リーベンシュタインに近い丘の上で、子供達と共に遊戯をし、歌を歌つている老フレーベルの姿は、マレンホルツ、ビュロー夫人によつて、詳細に描

写されている。

一八五一年六月、フレイベルは、教え子ルイゼ、レヴィン嬢と再婚した。彼女が以前から彼のために献身的に働いていたが、この後、フレイベルの最晩年を、優しい愛情をもつて世話をすることとなつた。苦惱多きフレイベルは、晩年に至つて漸やくその生活も專業も安定するかと見えたのであるが、その年の八月、突如として、プロシヤ政府による幼稚園禁止令が發布された。彼の驚きは大きかつた。その原因は、彼の甥カールフレイベルと、彼とを取り違えて、カールが社会主義運動に関係していたために、フレイベルの幼稚園は、社会主義的無神論的傾向を有すると做されたのである。あらゆる運動は徒勞に帰し、彼の畢生の事業は、誤解のために投げられた一石によつて、全く根絶したかに見えた。フレイベルの失意と落胆は大きかつた。

それでも翌一八五二年、チオドル・ホフマンの議長のもとにゴータに開会された一般独逸教員會議の席上では、彼が入場するや、全会員は恰も一人の人間のように起立した。全独逸は、彼の偉大なる業績を認めていたのである。同年四月二十一日、彼の満七十歳の誕生日が、マリエンタールにおいて盛大に行なわれた。子供達は種々の催しを行い、彼らの手によつて、月桂樹が彼の頭に飾られた。

併し乍ら、幼稚園禁止令は彼の心に大きな傷を与え、その

ためにフレイベルは健康を害して病の床に就く身となつていた。そしてそれから二カ月後、一八五二年六月二十一日、ルイゼ・レヴィン夫人、親友ミツデンドルフ、その他の生徒達に見守られて、その苦難多き生涯の幕を閉じた。

墓碑はマリエンタールに近いシュワイナに建てられた。それは恩物の球と円錐と立方体とを重ねた構図であり、その墓碑には、フレイベルの愛句「いざや我等を我等が子供に生きしめよ。」「Kommt, lasst uns unsern Kinder leben.」の句が刻まれている。

☆ ☆ ☆

此の簡単な傳記を記すに當つて、私は全面的に、長田新氏譯「フレイベル自傳」(岩波書店刊行、昭和十二年)を参照した。文中かきの中の部分は、長田氏譯文そのままを引用した個處である。その他莊司雅子氏著「フレイベルの教育學」(株式會社フレイベル館昭和二十五年)及び倉橋惣三氏著「フレイベル」(大教育家文庫、岩波書店、昭和十四年)を適宜参照、引用した。煩雜を避けるため一々引用個處を明瞭にしてないが、御諒承願いたい。

フレイベル百年記念講演会

六月二十三日(土曜日)午後正一時半からお茶の水女子大學講堂にて(文京區大塚町)

一 フレイベル遺跡巡禮の思い出

——開会の挨拶にそえて——

日本幼稚園協会会長
日本保育学会会長
全国保育連合会顧問

倉橋惣三

二 新しきフレイベルの発見

東京大学教授

海後宗臣

三 フレイベルと現代教育の理念

東京教育大學
教育學部長

石山脩平

四 閉會の辭

日本保育学会副会長

山下俊郎

昭和二十六年五月

主催

協賛

日本幼稚園協會
日本保育學會
東京都私立幼稚園協會
東京都私立幼稚園協會
フレイベル館

○ 來聴随意、歡迎 靴又は草履のこと

○ 六月二十一日(木曜日)と二十四日(日曜日)にNHKからフレイベルに関する放送が行われる筈です。

幼稚園に入園を希望する幼児の

取扱について

このたび別紙のように「幼稚園に入園を希望する幼児の取扱について」の通達が、文部省初等中等教育局長からだされたが、その趣旨はつぎの二点にある。

1、幼稚園に入園を希望する幼児は、すべて入園させたいが、現状では、入園を希望する幼児を、すべて入園させることは施設の不足等からとうていできない。

したがつて、その入園者は、希望者の中から、当然せんこうすることとなるが、その場合、各幼稚園にも種々の事情はあるが、一人でも多く幼稚園教育を受けさせる機会を与えるという立場から、当分一年保育の幼児を優先的に入園させ、二年、三年保育の幼児は、施設に余裕のある場合に入園させてほしいとの意味である。

このことは、幼児期に、幼稚園教育を少しでも受けさせておくことは是非必要であるが、現状では、それが不可能であるから、現状において、もつとも多くの幼児に幼稚園教育を受けさせる方法としてとつた措置である。

2、幼児教育振興のためには、施設の増設増加はもちろん望ましいことであるが、現在のような経済状態では、急にそのようなことも困難と思われるので、各地方地方の実情に応じて、現在できる範囲で、入園を希望する幼児をすべて入園させることができるように、研究してほしいとの意味である。

その方法としては

- (1) 小学校や中学校あるいは女子高等学校の教室を活用する。
- (2) 右の他の施設で活用できるものを利用する。
- (3) 現在の施設を最大限に活用して、二部保育を行う。ただしこの場合は職員の組織を考える必要がある。

写

文初第一三三號

昭和二十六年二月二十日

各 都道府県教育委員会
都道府県知事 殿

文部省初等中等教育局長

辻 田 力

幼稚園に入園を希望する幼児の取扱について（通達）

幼稚園に入園を希望する幼児は、近年いちじるしく増加してきていますが、現状では、施設その他の事情から、その希望する幼児をことごとく入園させることは、はなはだ困難であると思われる。

さしあたり、今後幼稚園に入園を希望する幼児の取扱については、幼稚園教育の重要性にかんがみ、なるべく多くの幼児に、小学校入学前一年間の幼稚園教育の機会が、与えられるよう格段の御配慮を願います。

なお地方の実情に応じて、二部保育や適当な空施設の利用等の方法も考えられますので、じうぶん御研究の上幼児教育の発展が期せられるよう御指導願います。

幼稚園教員養成学校の新設

1、短期大學

昭和二十六年年度新設の幼稚園教員養成を目的とする短期大學として、左の学校が認可された。

東京 宝仙学園短期大學

保育科 三〇名

(旧中野高等保育学校)

東京都中野区宮前町四八

2、文部大臣指定の養成機関

教育職員免許法第五条によつて、幼稚園教員を養成するところのできる施設は、幼稚園教員養成コースを持つ大学か、あるいは文部大臣の指定する幼稚園教員養成機関でないと許されないようになったが、(別表第一備考二)

その第一回の指定として左の学校が認可された。なおこの認可は昭和二十五年からである。

東京 東京高等保育学校

四〇名

品川区西品川五丁目一〇〇二

東京 東京保育専修学校

五〇名

杉並区高円寺三の二九八

竹早教員養成所

一五〇名

文京区竹早町(東京学芸大学竹早分校内)

玉成高等保育学校

四〇名

杉並区大宮前五の二八八

聖徳学園高等保育学校

五〇名

港区芝通新町一三

中野高等保育学校

四〇名

中野区宮前町四八

東京保育伝習所

一〇〇名

文京区原町一〇一

愛知 柳城女子学院

一〇〇名

(名古屋市中区和区山脇町三の二四)

單位修得の御知らせ

東京女子高等師範學校主催幼稚園教員認定講習を受講せられた方へ

今回、昭和二十二年の夏（昭和二十二年七月二十一日から五日間）と秋（十月八日から五日間）の二回に亘つて開催された標題の幼稚園教員認定講習会に出席された方に対し、夏季の分には教育原理一単位を、秋季の分には教育心理一単位を、二回ともに出席された方には教育原理一教育心理一計二単位をお茶の水女子大学から授与されることになりましたからお知らせ致します。御希望の方は左の注意事項御熟読の上手続きをなさつて下さい。

（注意）

- 講習修了の際差し上げました講習証明書^{〇〇}を、送附先きを明記した封筒（八円切手貼付）同封の上、左記本会宛て御送り下さい。これと引きかえに単位の証明書をお送り致します。
- 実費として金五拾円を御送り下さい。
- 御不審の点は御遠慮なくお問合せ下さい。この場合必ず返信料をお添え下さい。

昭和二十六年五月

日本幼稚園協會

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会主催講習を受講せられた方々へ

昭和二十一年、二十三年、二十四年の三カ年に亘つて開催した講習会受講者に保育内容二単位を、お茶の水女子大学から授与されることになりましたからお知らせ致します。

御希望の方は左の注意事項御熟読の上、手続きをなさつて下さい。

(注意)

○受講期間と単位

昭和二十一年九月十一日から四日間

昭和二十三年七月二十一日から二十五日まで五日間……(二単位)

昭和二十四年七月二十一日から二十五日まで五日間……(二単位)

昭和二十一年のみを受講された方には残念ながら単位は与えられません。

○右期間の受講者中、昭和二十五年九月現在東京都の公立幼稚園に在職の方は、東京都の教育委員会から授与されている筈ですから本学から単位の発行は致されませんが御承知下さい。

○講習修了の際差し上げてあります。講習証明書^{〇〇}を左記本会宛て御送り下さい。この講習証明書と引きかえに単位の証明書^{〇〇}を御送り致します。この際送附先きを明記した封筒(八円切手貼付)を同封して下さい。

○実費として金五拾円をお送り下さい。

○御不審の点は御遠慮なくお問合せ下さい。この場合返信料を必ずお添え下さい。

昭和二十六年五月

日本幼稚園協会

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内

會から

○世界幼稚園の祖フレールの百年を心から記念します。

○本誌フレール特集号は、諸家の寄稿によつて我國フレール研究の權威大成となりました。諸家に厚くお礼を申し上げますと共に、誌友諸君にも喜んでいただきます。フレール館小高社長の熱心なる協力を深く感謝します増頁のため特別定価にしたことを御諒解願います。

○六月二十三日(土)午後一時からのフレール百年記念講演会は、之れ亦諸保育関係会と諸講師の協力によつて、広く來聴の同志を待っています。お誘いあわせ多数御会同下さい。○NHKでも六月二十一日と六月二十四日(日)に、時に此の百年を記念してフレールに就て放送せられる筈です。

○岩波書店がフレール記念の意味を以て、長田新君の『フレール自伝』と倉橋本誌主幹『フレール』を増刷することは、有力なる協同と謝さねばなりません。

○東京都私立幼稚園協会その他諸協会の主催のフレール百年祭も盛大に計画されています。

○以上は東京だけで今まで知れているところですが、神戸頌榮短期大学でも記念講演会が行われる由ですし、その他大阪、広島、徳島福岡等においても盛んな計画のある由です。

○ただ本誌特集のため、連載中の平井信義氏の講座と松原至大氏アメリカ童話を今月も亦休載したことは、同氏と読者とに深くおわびします。

○新緑、各地に美しく、貴園の庭をも飾つていることと思います。まことにフレールを記念するによき季節です。四月二十一日から六月二十一日の二カ月を、美しい記念の月としましょう。その間に子ども日の含まれ児童憲章の制定せられるのも意義あることと言わねばなりません。

『幼児の教育』編集

編集主任 倉橋惣三
協力委員 牛島義友
及川ふみ
齋藤文雄
多田鐵雄
波多野完治
山下俊郎
(五十番順)
西山浪太郎

編集委員

日本幼稚園協會

幼児の教育 第叁卷 第六号

定価 金五拾五円

昭和二十六年六月十五日印刷
昭和二十六年六月二十日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉橋惣三
発行者

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内
發行所 日本幼稚園協會

東京都千代田区神田神保町二ノ四

發賣所 株式会社
フレール館

電話九段(33)五七・三九七・三〇〇番
振替 東京一九六四〇番

○本誌御購読について注文申込その他は凡べて發売所フレール館宛に願います

保育資料 **うたとあそび**

四六倍判 一八四頁
定価 三二〇〇円
書留送料 六五円

お茶の水女子大 戸倉ハル・東京高師 小林つや江共著
著者多年の経験と蘊蓄を傾倒し、幼稚園及小学校低学年用の教材の粹八十曲をあつめ、これを春・夏・秋・冬の四に分けて詳説したもので絶好の保育資料として各地の講習会等に於て讚辭を頂いています。
表紙七色刷・扉等三色刷——美麗製本——
最寄の書店又は本社に御注文下さい。

遊戯と **リレーレース**

B6判二四二頁
定価 三〇〇〇円
送料 三五〇円

●多年の蘊蓄を傾倒してものした、遊戯に関する理論及び実際指導の權威書。運動会参考資料として好適。
東京教育大学教官 中島 海著

鬼遊びとかけっこ

B6判三三七頁
定価 二五〇〇円
送料 三五〇円

●遊戯研究及実地指導に不可欠の好著。あらゆる種類の鬼遊びとかけっこを網羅蒐集したもので、運動会用として好著。
東京教育大学体育部教官編

体育大辞典

A5判一〇〇四頁
一万二千項目収録
定価 一三五〇〇円

(第二版出来發賣中)

東京都文京区大塚仲町二

発行所 株式会社 **不味堂書店**

振替東京六八七三九番

上澤謙二著 **新幼児ばなし**

三百六十五日

一年三百六十五日、毎日、季節と児童心理にふさわしいお話を一題ずつ選んだ書。たゞ抑揚をつけて読みさえすれば、どんなお話しが出来るように書いてあるのが特色です。今回の改訂に当つて各巻とも時代にあつさわしい新作童話を補つた。

全六巻完成

一・二月の巻 三・四月の巻
五・六月の巻 七・八月の巻
九・十月の巻 十一・十二月の巻
B6判平均三百頁 価各二百三十円 24円

上沢謙二著

価百八十円 20円

母のため **赤ちゃんばなし**

幼稚園以前の母の膝にいる嬰兒のためのお話とその仕方
發行 東京都銀座・西八の八 恒星社厚生閣
振替 東京五九六〇〇〇

近藤耕藏序 **家事物理学** 價四五〇圓
武井新一郎著 三〇〇圓

7 月 号 予 告

観
察

キンダブック

繪
本

第 6 編

KINDER-BOOK

〔星のはなし〕

第 4 集



!! 幼児の健やかな成長を願う
意味に於て是非與えたい!!

A 4判・16頁・月一回発行
定価 40円・送料 6円

「お星さま」

天体は、幼児と親しみが、ない歌ではありませんが、それを幼児に語ることは、必ずしも容易ではありません。しかし高い夜空を仰ぎ、美しい星を望むことも子供に与えたい自然観察の一つであります。

お星様の観察は何も天文学ではありませんけれども、幼児天文学も亦、幼児にもたせたい自然界の興味の一つでなければなりません。

みやび心と科学とが、渾然として一つに溶けている幼児達を、きらりと、またたく星の世界への親しみに導こうとするわれらの教育的希望を詩人と画家の諸先生の御協力を得て、編集いたしました。

發行所 東京都千代田区神田 株式会社 フレーベル館 振替口座東京 一九六四〇番
神保町二丁目四番地